

沖縄県立博物館

紀要

第30号 (2004)

<自然史>

- 嵩原建二・中村和雄・国吉修 伊平屋島及び伊是名島における鳥類記録について 1
仲地明・田中聰 西表島山地林におけるトカゲ類の活動について 27

<美術工芸>

- 津波古聰 資料紹介：殷元良の絵画資料 37

<民俗>

- 久場政彦 研究ノート：尾崎清次と『琉球玩具図譜』について 43

沖縄県立博物館紀要

第30号(2004)

沖縄県立博物館

目 次

CONTENTS

<自然史> NATURAL HISTORY

嵩原建二・中村和雄・国吉修 伊平屋島及び伊是名島における鳥類記録について1

Kenji TAKEHARA, Kazuo NAKAMURA and Osamu KUNIYOSHI

Notes on Bird Records in Iheya I. and Izena I., the Ryukyus

仲地明・田中聰 西表島山地林におけるトカゲ類の活動について27

Akira NAKACHI and Satoshi TANAKA

Activity of Lizards in a Subtropical Forest on Iriomotejima Island, the Southern Ryukyus

<美術工芸> ARTS AND CRAFTS

津波古聰 資料紹介：殷元良の絵画資料37

Satoshi TSUHAKO

In-genryou Work of Art in Okinawa Prefectural Museum

<民 俗> FOLKLORE

久場政彦 研究ノート：尾崎清次と『琉球玩具図譜』について43

Masahiko KUBA

The Work of Seiji Ozaki and His Book "Ryukyu Printed Folk Toy's Books"

伊平屋島及び伊是名島における鳥類記録について

嵩原建二¹⁾・中村和雄²⁾・国吉修³⁾

Notes on Bird Records in Iheya I. and Izena I., the Ryukyus

Kenji TAKEHARA¹⁾, Kazuo NAKAMURA²⁾ and Osamu KUNIYOSHI³⁾

はじめに

伊平屋島及び伊是名島における鳥類の記録については、古くはOgawa (1905)、Kuroda (1925)などの報告が知られている。その後はまとまつた鳥類調査は実施されず、断片的な記録として、沖縄野鳥研究会編 (1986) やDouglasら (1996) などの報告が見られる。最近では他に両島におけるこれまでの断片的な記録をまとめて掲載した日本鳥学会 (2000) や沖縄野鳥研究会編 (2002) などの分布記録が見うけられる。また、島ごとの調査としては、伊是名島に関して比嘉 (2002) による観察記録が報告されているが、伊平屋島では新垣 (1971) や沖縄県自然保護課編 (1997) などの調査報告がある。

筆者らはこれら両島の鳥類相の把握を目的として、これまで両島から報告のある鳥類記録と数回にわたる現地調査で得た記録を加味して、両島の鳥類目録作成を試みた。本報告が両島の鳥類相を解明するつたない資料や環境学習、エコツーリズム等の資料として活用されることになれば幸いである。

なお、本報告を行うにあたり、鳥類調査に協力と便宜を図っていただいた伊平屋村教育委員会及び同歴史民俗資料館、伊是名村教育委員会及び同村立ふれあい民俗資料館、沖縄県自然保護課に対し、深く感謝します。また、鳥類の観察記録を提供していただいた伊平屋村役場の西銘真助氏、伊是名村役場の名嘉修氏、伊是名村在住の県鳥獣保護員名嘉薰氏に対し厚く感謝申し上げます。

調査地概要

伊平屋島は沖縄島の北西に所在し、北緯27度2分、東経127度58分に位置する。広さは20.59km²で、フェリーの発着する今帰仁村運天港からは41.1km、隣接する伊是名島からはわずか12.6km北方に所在し、伊平屋村は伊平屋島の属島である野甫島を合わせ2島からなる(図1)。

地勢的には東北端の田名岬から南西端の米崎まで14kmと細長いが、島の横幅はせまく、急峻な地形で、北側から田名後岳、腰岳、賀陽岳など高さ200m前後の脊梁山地が見られる(図版I参照)。島の南端の岬は米崎で、野甫島にはここから橋でつながっている。

伊平屋島は地質的には木崎 (1985) によると、新期古生界、新期中生界と第四紀系堆積物からなり、基盤の古生層は層状チャート、砂岩、緑色岩と少量の頁岩、礫岩及び石灰岩から構成され、伊平屋層と前岳層からなる。

伊平屋層は北部の弥平岩に露出し、砂岩と頁岩を主として、石灰岩レンズを挟み、この石灰岩からはフズリナが見いただされている。

中生界の田名層は島の中・南部に分布し、砂岩と頁岩の互層からなり500mの厚みがある。第四紀系の地質には、古期崖錐堆積物、砂質石灰岩、前泊層と沖積層が見られる。古期崖錐堆積物としては、島中央部田名集落の後背地に分布し、基盤石に由来するチャート、砂岩の角礫を赤褐色粘土が埋めている。

1) 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

2) 〒902-8521 那覇市国場555 沖縄大学

Okinawa University, 555, Kokuba, Naha, Okinawa 902-8521, Japan

3) 〒905-0793 伊平屋村字我喜屋251 伊平屋村役場

Iheya Vill., 251, Gakiya, Iheya Vill., Okinawa 905-0793, Japan

前泊層（段丘堆積物）は島の平野部周辺山麓に標高10~20mの平坦面をつくって分布する。

砂質石灰岩は伊平屋島の南にある野甫島に分布し、補有孔虫・サンゴ・二枚貝・石灰藻を多量に含む。沖積層は島の沖積平野前面に形成される砂丘の後背湿地に見られ、上位が中~粗粒の砂層と下位はシルト~粘土層が広がり、その中に枝サンゴ破片や貝殻片を含む海成粘土層とされる。

森林植生は沖縄島北部と同様のイタジイが優占するシイ林となっている。また、島の北側には田名集落に隣接して、県内でも有数な湿地である田名湿地が広がっている。

土地利用としては、島面積のほぼ半分にあたる11.79km²が山林によって占められ、次にサトウキビ栽培を中心とする畑地が2.84km²、原野が2.86km²、水田1.33km²と続く。この中で畑地や水田は海岸近くや山間の低地に開かれている。

集落は海岸近くの平地に形成され、北側から田名、前泊、我喜屋、島尻、そして、野甫島に野甫の5つの集落がある。島の人口は昭和30年代には4千人を超える時期もあったが、今日では減少傾向にあり、世帯数555世帯、人口1,633人である（平成13年8月現在）。

一方、伊是名島は伊平屋島の南側に所在し、広さ14.12 km²で、他に具志川島、屋那覇島、降神島の属島を有し、伊是名村全体の総面積は15.30km²である。伊是名島は伊平屋島に比べ平坦で、島中央でも標高119.6mほどの台地状の山地部が南北にはしり、ここを分水嶺として、ゆるやかな勾配で海岸に至っている（図版I参照）。集落は海岸沿いに形成され、南に伊是名、西に勢理客、東に諸見、仲田、

北に内花の5つの字からなる。人口は1,895人で、港が近くの仲田や諸見での人口が多い。

伊是名島の地質は木崎（1985）によると、その基盤は伊是名層と諸見層からなり、伊是名層は層状チャートを主とする累層で、諸見層はスランプ構造を特徴とする砂岩頁岩互層と礫岩からなる。また、この層は1000mを超える厚さをもち、具志川島や屋那覇島にも分布し、層状チャートの他、砂岩頁岩の互層、変成した火成岩、石灰岩などをはさむ。しかしながら、諸見層については、詳細に解明されていない。

森林植生は基本的には沖縄島北部や伊平屋島とほぼ同じで、ギーマやタイミンタチバナ、エゴノキなどは共通して生育しているが、興味深いことにイタジイは分布していない。

島の産業はサトウキビ栽培を中心とした農業で、一部に仲田、伊是名、諸見などの海岸近くの低地には水田や田イモ栽培地が見られる（図版I参照）。また、島の西部には牧場が開設され、肉用牛の飼養もさかんである。

調査概要と方法

鳥類調査は、1986年から2002年の間に数回島に渡り現地調査を実施した（表1）。したがって、本報告は伊平屋島でのべ21日、伊是名島でのべ11日の現地調査に基づくものである。

調査の際は島全域を調査対象として、早朝から夕刻まで車両で島内をくまなく回り、鳥体や鳴き声等で確認される鳥類の記録に努めた。また、林道や農耕地、水田等で夜間調査を適宜実施し、夜行性の鳥類の確認を行った。

表1 現地調査概要

調査期日	調査地	備考（調査者等）
1986年8月1日～8月3日	伊平屋島・野甫島	嵩原
1996年11月2日～11月4日	伊平屋島・野甫島	嵩原
1996年12月21日～12月22日	伊平屋島・野甫島	嵩原
1998年2月5日～2月7日	伊是名島	嵩原
1998年10月13日～10月18日	伊是名島	嵩原
1999年9月27日～9月29日	伊平屋島・伊是名島	嵩原・中村
2000年5月4日～5月5日	伊平屋島・野補島	嵩原
2000年8月24日～8月26日	伊平屋島・野甫島	嵩原
2003年11月20日～11月24日	伊平屋島	嵩原

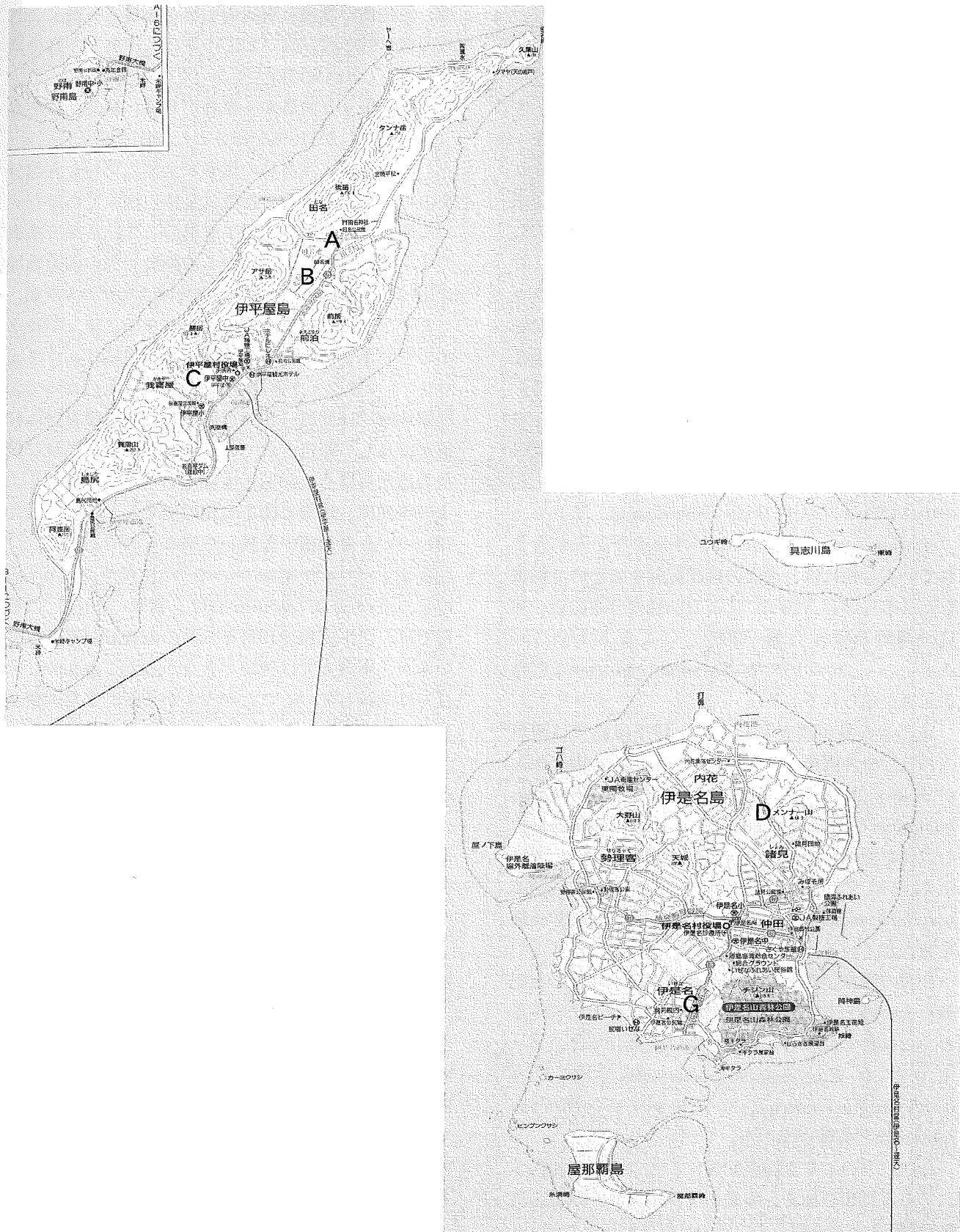


図1. 伊平屋島・伊是名島の調査位置地
(旺文社編 2000改変)
(凡例：A田名湿地、B田名水田、C我喜屋水田、D諸見水田、G伊是名水田)

調査結果と考察

現地調査の結果、伊平屋島で87種、伊是名島で80種の総計109種の鳥類を記録した(表2)。

両島におけるこれまでの鳥類記録については、古くはOgawa (1905) により、両島からリュウキュウカラスバト *Columba jouyi* の採集報告が見られる。その後、折居彪二郎氏の採集標本をもとに琉球列島の鳥類相について言及したKuroda (1925) によって、伊平屋島からリュウキュウメジロ *Zosterops japonica loochooensis* やリュウキュウカラスバトなど8種、伊是名島からは11種の鳥類記録が報告されている。しかしながら、この中から現在ではリュウキュウカラスバトがすでに絶滅している。

最近の記録としては、特にDouglasら (1996) によって作成された沖縄県産鳥類目録（暫定的な記録を含む）の中に、両島での記録種を65種掲載し、この中にはオオノスリ *Buteo hemilasius*、サンカノゴイ *Botaurus stellaris*などの希少な記録が含まれている。他には、過去の確認記録をまとめて掲載した日本鳥学会 (2000) による23種の分布記録や他に沖縄野鳥研究会編 (2002) によるトラフズク *Asio otus*、リルビタキ *Tarsiger cynurus* など鳥類記録が見られる。

島ごとの鳥類調査としては、伊平屋島では新垣 (1971) や沖縄県自然保護課編 (1997) の調査報告がある。新垣 (1971) はアカヒゲ *Erithacus komadori* やシロガシラ *Pycnonotus sinensis* を含む21種を記録し、沖縄県自然保護課編 (1997) では田名湿地を中心とした調査でカルガモ *Anas poecilorhyncha* やカワセミ *Alcedo atthis* など45種を報告している。

今回の観察記録と筆者らが過去の現地調査した記録をまとめ、上記のこれまでの鳥類記録と比較すると、これまでに報告されていない種としては、ブッポウソウ *Eurystomus orientalis*、ヨタカ *Caprimulgus indicus*、ヤマショウビン *Halcyon pileata*など47種があった。

今回、このような観察記録に、これまでに報告されている鳥類を加え、巻末の「伊平屋島・伊是名島鳥類目録」作成を試みた。その目録に示したように、両島合わせて総数が150種（亜種含む）となり、その内訳をおおよその生息区分で分けると、留鳥が24

種、帰化種が2種、現状不明種が3種あった。これらの種以外の渡り鳥としての夏鳥、旅鳥、冬鳥の飛来については両島ほぼ大差ないものと思われるため、まとめて扱うと両島から夏鳥が5種、旅鳥及び冬鳥（迷鳥含む）が116種記録された（図2）。

したがって、渡り鳥の比率が全体比78%と大部分を占めており、留鳥の種数は全体の16%であった。

この留鳥の種数は、伊平屋島のように常緑広葉樹のイタジイ林が同様に広がる沖縄島北部の国頭地域に比べると、シジュウカラやヤマガラなどのカラ類、ノグチゲラやコゲラなどのキツツキ類、ヤンバルクイナやオオクイナなどのクイナ類、他にリュウキュウサンショウクイが確認されなかった。したがって、国頭地域では嵩原 (1993) によって絶滅種を含み40種が留鳥して報告されているので、伊平屋島及び伊是名島からはその60%と少数であった。おそらく、この差異は、地史と関る鳥相の変せんと、樋口 (1979) のいう島面積の差異から来るものであろう。

なお、リュウキュウハシブトガラス *Corvus macrorhynchos connectens* は、新垣 (1971) の報告では、伊平屋島で1971年5月の調査で記録されているが、本調査では確認できなかったことから、今日では激減していることがうかがえる。また、伊是名島では2001年4月 (比嘉 2002) の確認があるが、本調査では確認できなかった。したがって、両島とも本種は激減している可能性がある。

この中で以下に留鳥及び渡り鳥、帰化鳥に分け、その確認種の主なものについて希少な観察記録や特筆すべき種と思われるものについて、確認状況等について言及する。

留鳥

表3に示したように両島では絶滅種とされるリュウキュウカラスバトと外来種のアミハラ、キジを含め24種の鳥類が留鳥と思われる。しかしながら、県内で留鳥として扱われ、過去に調査記録で確認されている琉球列島固有種のアカヒゲ、アマミヤマシギ、外来種と考えられるシロガシラの3種は、現状不明として除外した。

以下に留鳥および現状不明種の中からその主な種について生息現状等について述べる。

表2 本調査で確認された鳥類

種名	伊平屋	伊是名	種名	伊平屋	伊是名
カイツブリ	○	○	キヨウジョウシギ	○	○
カワウ		○	トウネン		○
リュウキュウヨシギ	○	○	オジロトウネン		○
ゴイサギ	○	○	ヒバリシギ	○	○
ササゴイ	○		ウズラシギ		○
アカガシラサギ	○		ハマシギ		○
アマサギ	○	○	エリマキシギ	○	
ダイサギ	○	○	アカアシシギ		○
チュウサギ	○	○	コキアシジギ		○
コサギ	○	○	アオアシシギ	○	○
クロサギ	○	○	クサシギ	○	○
アオサギ	○	○	タカブシギ	○	○
ムラサキサギ	○		キアシシギ	○	○
オシドリ	○		イソシギ	○	○
マガモ	○		ソリハシシギ		○
カルガモ	○	○	チュウシャクシギ		○
コガモ	○	○	ヤマシギ	○	○
ヒドリガモ	○		タシギ	○	○
オナガガモ	○	○	セイタカシギ	○	○
ハシビロガモ		○	ツバメチドリ		○
スズガモ		○	クロハラアジサシ	○	○
ホシハジロ		○	オオアジサシ	○	
ミサゴ	○	○	ベニアジサシ	○	○
アカハラダカ	○	○	エリグロアジサシ	○	○
ツミ	○	○	コアジサシ	○	○
オオノスリ	○		カラスバト	○	
サシバ	○	○	キジバト	○	○
チュウヒ	○		ツツドリ	○	
チョウゲンボウ	○	○	カッコウ	○	
ハヤブサ		○	ホトトギス	○	
コウライキジ		○	トラフズク	○	
ミフウズラ	○	○	コノハズク	○	○
ヒクイナ	○		アオバズク	○	
シロハラクイナ	○		ヨタカ		○
オオバン	○		アマツバメ		○
バン	○	○	アカショウビン	○	○
コチドリ	○	○	カワセミ	○	○
シロチドリ	○	○	ブッポウソウ	○	
メダイチドリ	○	○	ヒバリシギ	○	
オオハクセキドリ		○	ツバメ	○	○
ムナグロ	○	○	リュウキュウツバメ	○	○
ダイゼン		○	ツメガセキレイ	○	○
タゲリ	○	○	キセキレイ	○	○

(続き)

種名	伊平屋	伊是名		
ハクセキレイ	○	○		
ビンズイ	○			
セジロタヒバリ		○		
マミジロタヒバリ	○	○		
ムネアカタヒバリ		○		
タヒバリ		○		
ヒヨドリ	○	○		
シマアカモズ	○			
ジョウビタキ	○			
ノビタキ	○	○		
イソヒヨドリ	○	○		
シロハラ	○	○		
ウグイス	○			
セッカ	○	○		
キマユムシクイ	○	○		
キビタキ	○			
エゾビタキ	○			
サンコウチョウ	○	○		
メジロ	○	○		
ミヤマホオジロ	○			
カシラダカ		○		
ムクドリ	○			
アミハラ	○	○		
合計	109	87	80	

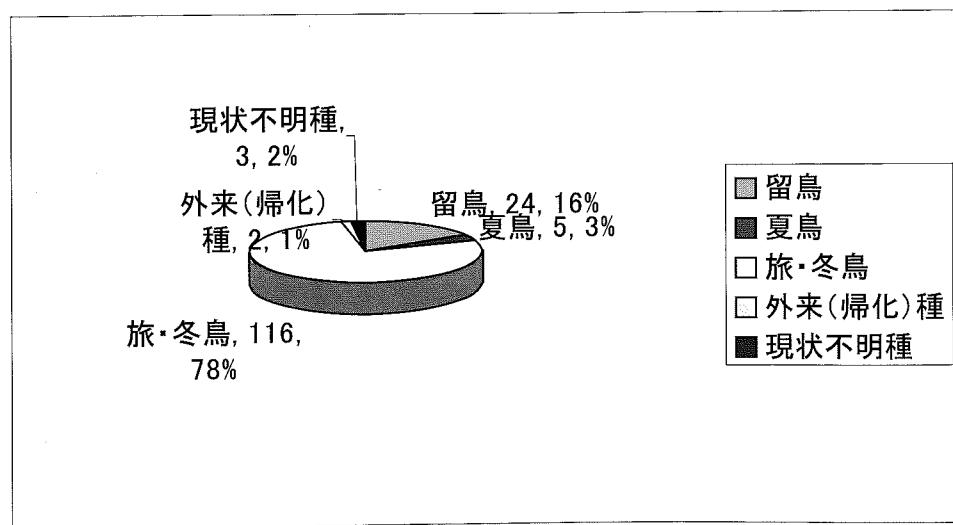


図2 伊平屋島・伊是名島の鳥類区分

1) カラスバト *Columba jouyi*

伊平屋島の腰岳や前岳周辺では見る機会が多く、鳴き声もよく聞かれた。おそらく森林地域を中心には生息しているものと思われる（写真7）。また、伊是名島の大野山でも1個体が確認された。他に2001年4月28日に勢理客北方の水田地域を飛翔する1個体が観察されている（比嘉 2001）。したがって、両島とも生息確認された。

2) ミフウズラ *Turnix suscitator*

両島で確認されたが、伊平屋島では特に数は少ないようと思える。これは同島でネズミ駆除やハブ駆除のため1953年8月にはマングースを恩納村で10頭捕獲し、各字に2個体づつ放し、1968年1月25日にはイタチを288個体放逐したことがある（伊平屋村役場 1994）。

現在ではイタチが定着してしばしば目撃されることから、本種による捕食圧がかかっている可能性がある。本種は沖縄県版のレッドデータブック（沖縄県自然保護課 1996）では希少種としてランクされ、保護すべき貴重種である。したがって、本種が伊平屋島で絶滅しないような方策をとることが望まれる。

3) ズアカアオバト *Treron formosae*

2003年11月23日の伊平屋島腰岳林道における夜間調査で巣立ち雛2個体とねぐらを取る個体が観察された（写真8）。本種は広く南西諸島に分布し、その繁殖時期は通常、春期から夏期とされているが、個体によっては11月下旬の晩秋から冬季にかけて繁殖活動を行う個体もいることが示唆された。

4) カワセミ *Alcedo atthis*

伊平屋島田名湿地とその周辺水路などでしばしば採餌のため、コンクリート護岸の上にとまっている個体が目撃された。おそらく、他の島同様河川域を中心に少數が生息しているものと思われる。

5) シロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus*

2003年11月21日に田名湿地で若鳥が観察されたことから、繁殖していることが示唆された。沖縄島や宮古・八重山諸島ではごく普通に見られる種であるが、伊平屋島では本調査での確認地がわずか1カ所

と、その生息個体数は沖縄島に比較して少ないようと思える。

6) ウグイスの一亜種 *Cettia diphone* ssp.

2000年8月の伊平屋島における腰岳林道沿いの調査で、10個体を確認した。したがって、本種は留鳥としての繁殖個体群が生息するものと思われる。最近隣接する沖縄島に生息する留鳥のウグイスについては、梶田ら（2002）によって、大東諸島で絶滅したとされダイトウウグイス *C. d. restricta* とされるなど興味深い研究がみられる。このことから、今後伊平屋島に生息する個体群については沖縄島に生息する留鳥のウグイス同様、形態的及び遺伝的な手法によって詳細に検討されるべき余地が残っているものと思われる。なお、冬期には両島に冬鳥としての本土産ウグイス *C. d. cantans* も普通に飛来するものと思われる。

7) アオバズク *Ninox scutulata*

本島に生息する亜種はリュウキュウアオバズク *N. s. totogo* とされている（日本鳥学会 2000）。本亜種については、1997年7月に伊平屋村老人福祉施設「とらず園」のポーチ柱のそばで繁殖活動を行い、2001年6月には村営住宅の芝生の上での地上営巣が確認された。また、他にも離島総合センターのベランダや村庁舎2階のベランダ、村立体育館のベランダ等人工物での営巣確認もされ、村営住宅の芝生上を除いては何れもコンクリートの上である例も知られている。

県内におけるフクロウ類の地上営巣については、オオコノハズクで2例が知られている（嵩原1994・嵩原2002）が、本亜種の繁殖活動についてはこれまでの知見が乏しいため、その報告は見あたらない。しかしながら、本亜種もまれに地上営巣することが確認された。

漂鳥及び外来（帰化）種

1) ムラサキサギ *Ardea purpurea* (漂鳥)

伊平屋島田名湿地で1998年冬季の調査で若鳥1個体を確認した（写真9）。本種は国内では宮古・八重山諸島を繁殖分布の北限としている。したがって、県内では留鳥扱いであるが、沖縄島や本地域では繁

表3 伊平屋島・伊是名島の留鳥

種名 学名	伊平屋	伊是名	備考
カツブリ <i>Podiceps ruficollis poggei</i>	○	○	
リュウキュウヨシゴイ <i>Ixobrychus cinnamomeus</i>	○	○	
クロサギ <i>Egretta sacra sacra</i>	○	○	
リュウキュウツミ <i>Accipitaer gularis iwasakii</i>	○	○	
ミフウズラ <i>Turnix suscitator okinavensis</i>	○	○	
ヒクイナ <i>Porzana fusca phaeopyga</i>	○	○	
シロハラクイナ <i>Amaurornis phoenicurus chinensis</i>	○	○	繁殖未確認
バン <i>Gallinula chloropus indica</i>	○	○	
シロチドリ <i>Charadrius alexandrinus nihonensis</i>	○	○	
リュウキュウキジバト <i>Streptopelia orientalis stimpsoni</i>	○	○	
リュウキュウズアカアオバト <i>Treron formosae permagnus</i>	○	○	
リュウキュウカラスバト <i>Columba jouyi</i>	○	○	(絶滅)
カラスバト <i>Columba janthina</i>	○	○	
リュウキュウコノハズク <i>Otus scops elegans</i>	○	○	
リュウキュウアオバズク <i>Ninox scutulata totogo</i>	○	○	
カワセミ <i>Alcedo atthis bengalensis</i>	○	○	
リュウキュウツバメ <i>Hirundo tahitica namiyei</i>	○	○	
リュウキュウヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis pryeri</i>	○	○	
イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius philippensis</i>	○	○	
ウゲイスの1亜種(?) <i>Cettia diphone ssp.? # 1</i>	○	○	
セッカ <i>Cisticola juncidis brunneiceps</i>	○	○	
リュウキュウメジロ <i>Zosterops japonica loochooensis</i>	○	○	
スズメ <i>Passer montanus saturatus</i>	○	○	
リュウキュウハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos connectens</i>	○	○	
アミハラ <i>Lonchura punctulata</i>	○	○	外来種
コウライキジ <i>Phasianus colchicus karpowi</i>		○	外来種
合計 26種	25	26	

<特記事項> # 1 : ウゲイスの亜種名は未確定

殖せず冬季の迷行個体（漂鳥）の確認と思われる。本種の観察記録はDouglasら（1996）の報告の中でも金田昌士氏により田名湿地で確認されている。したがって、本調査での確認は2例目の観察報告となるもので、しばしば漂鳥として飛来することが示唆される。

2) コウライキジ *Phasianus colchicus karpowi* (外来種)

本種は飼育されたいたものがご抜けして野生化したものと思われ、伊是名島のほぼ全域に分布しているものと思われる（写真10）。特に勢理客や諸見などの水田地域では見る機会が多くなった。

本来沖縄諸島に生息していないこうした大型の帰化鳥（外来種）の生態系への影響は、田中・嵩原（2003）によって、八重山諸島小浜島におけるインドクジャクの野生化による補食圧で爬虫類の激減が指摘されている。キジは主に植物種子や地上に落ちた果実などを食するが、時には昆虫食を行うとされることから、クジャクと同様に、伊是名島でもキジの定着により在来の昆虫類等の生息に大きな影響を及ぼしている可能性が高い。また、地上を徘徊する在来種のミフウズラと餌資源や生息地の競合が起こる可能性がある。つまり、キジの定着は在来の生態系を大きく変容させる危険性が高いものと思われるところから、本来の生態系の保護のためには早急に捕

獲等の具体的な方策が求められべきであろう。

現状不明種

1) アカヒゲ *Erithacus komadori*

新垣（1971）によって、伊平屋島から観察報告が見られるが、さえずりによる確認であり、観察場所等詳細な記述は見られない。また新垣（1971）は本種の追認の必要性を指摘しているが、その調査時期は1970年5月で、本種の繁殖時期にあたることから、当時本種の繁殖個体群があったことが示唆される。しかしながら、本種の生息地として考えられる腰岳や嘉陽岳などの森林地域は林齡がすすみ、当時に比べると生息環境は良好になっているものと思われるが、本種の生息確認はできなかった。本種が激減した理由はまったく不明で、生息状況も不明である。したがって、留鳥かどうか、あるいはかつて生息してたかどうかなども含めて今度とも継続した調査が望まれる。なお、本調査で実施した伊平屋島での聞き取り調査でも本種の生息を伺わせる資料は得られなかった。

2) アマミヤマシギ *Scolopax mira*

沖縄野鳥研究会の比嘉邦昭氏（私信）により、1992年9月に伊平屋島の我喜屋周辺での観察記録が見られる。本調査では腰岳林道、田名湿地周辺、念頭平松周辺、我喜屋に所在する神社周辺など島全体を対象として夜間調査を実施したが、本種は確認されなかった。したがって、留鳥として生息しているかどうかの確認や渡りの調査も含め今後継続した調査が望まれる。

3) シロガシラ *Pycnonotus sinensis*

新垣（1971）によると伊平屋島で1971年5月に3日間継続して5個体観察したことを報告している。比嘉（1976）によると本種が八重山諸島以外の沖縄島で初めて確認されたのは、1976年11月の沖縄島南部糸満市米須とされている。したがって、伊平屋島ではその5年前に確認されたことになる。

本種は留鳥として生息する八重山諸島産とは異なり、沖縄島では外来種と考えられており、1976年以来沖縄島南部から北部へと分布域を広げ、現在島北部の国頭地域でも普通に見られる。しかしながら、

本調査では伊平屋島で本種の生息を確認することができなかつたので、定着できなかつたものと思われる。

渡り鳥

夏鳥

夏鳥としては、アカショウビン、サンコウチョウ、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、オオアジサシの5種が確認された。この中でオオアジサシは両島周辺で繁殖しているかどうかは未確認である。ここでは以下の2種についてその生息状況を述べる。

1) エリグロアジサシ *Sterna sumatrana*

伊平屋島では2000年8月の調査で、我喜屋集落から島尻集落に向かう海岸線に小岩礁や米崎などで数羽が見られた。おそらく、本種は両島周辺も他の島同様、ベニアジサシとともに夏鳥として飛来し、島周辺の無人島や岩礁などで繁殖したり、採餌に訪れているもの思われる。

2) ベニアジサシ *Sterna dougallii*

2000年8月の伊是名島での調査で内花海岸沿いで採餌する数個体を確認した。おそらく、島周辺にある小さな岩礁等で繁殖しているもの思われる。

旅鳥と冬鳥

夏の終わりである8月下旬から10月上旬頃に飛来し、さらに南下して越冬するために通過していく旅鳥と、越冬地が沖縄県内である冬鳥としての鳥類は、シギ・チドリ類やワシタカ類、ヒタキ類などに含まれる数多くの種類がある。ここでは明確に旅鳥と冬鳥を区分することは困難さがあるので、まとめてその主な鳥類について述べる。

1) アカハラダカ *Accipiter soloensis*

典型的な旅鳥で、伊平屋島では1999年9月27日～29日の現地調査の際、腰岳林道における9月29日の6時23分から7時50分の早朝の渡り調査で、合計658個体が確認された。したがって、沖縄島や宮古・八重山諸島と同様にアカハラダカの渡りも恒常に行われているもの思われる。

2) ブッポソウ

1999年9月28日に伊平屋島の腰岳林道で1個体が確認された。本種の越冬個体は確認されなかったことから、本種は他の島と同様、秋季に数少ない旅鳥として飛来し、通過していくものと思われる。

3) ヒバリ *Alauda arvensis* (写真11)

2003年11月21日に伊平屋島の田名水田で6羽を観察した。本種は数少ない冬鳥として県内各地に飛来することから、本島でも冬鳥としての飛来と思われる。

4) トラフズク *Asio otus*

1996年12月22日の田名湿地での夜間調査で1個体が観察され、写真撮影もされている（沖縄野鳥研究会編 2002）。本種は県内各地に希な冬鳥として飛来し、沖縄島や宮古・八重山諸島などでも記録されていることから、同様に冬鳥としての飛来である。

5) セイタカシギ *Himantopus himantopus*

両島ともに冬期に水田や湿地などの環境に少數が飛来し、越冬する（写真12）。本種は環境省編（2002）で絶滅危惧IB類にランクされている貴重種である。

表4 伊平屋島及び伊是名島で確認された貴重種

種名	ランク区分			生息状況
	天然記念物	環境省版 (2002)	沖縄県版 (1996)	
リュウキュウカラスバト		絶滅種	絶滅種	
サンカノゴイ		絶滅危惧 IB類	希少種	希な冬鳥
アマミヤマシギ 県指定		絶滅危惧 IB類	絶滅危惧	留鳥？
アアカアシシギ				冬鳥
セイタカシギ		絶滅危惧 IB類		冬鳥
チュウヒ		絶滅危惧 II類		希な冬鳥
ハヤブサ		絶滅危惧 II類		冬鳥
ツバメチドリ		絶滅危惧 II類		冬鳥
ブッポウソウ		絶滅危惧 II類		旅鳥
アカヒゲ		絶滅危惧 II類	希少種	留鳥？
チュウサギ		準絶滅危惧種	希少種	冬鳥
ミサゴ		準絶滅危惧種	危急種	冬鳥
ベニアジサシ		準絶滅危惧種	希少種	夏鳥
エリグロアジサシ		準絶滅危惧種	希少種	夏鳥
カラスバト 国指定		準絶滅危惧種	危急種	留鳥
アカモズ		準絶滅危惧種		冬鳥
ムラサキサギ			危急種	漂鳥
オシドリ			危急種	冬鳥
カツツブリ			希少種	留鳥
リュウキュウヨシゴイ			希少種	留鳥
リュウキュウヒクイナ			希少種	留鳥
ミフウズラ			希少種	留鳥
オオバン			希少種	冬鳥
シロチドリ			希少種	留鳥
オオアジサシ			希少種	夏鳥？
リュウキュウコノハズク			希少種	留鳥
カワセミ			希少種	留鳥
ヤツガシラ			希少種	旅鳥

6) ムクドリ *Sturnus cineraceus*

本種は通常秋季から冬期に飛来し、冬鳥として県内各地で見られる。しかしながら、一部の個体について繁殖活動を行うことが知られ、嵩原・原戸（1991）は伊江島における繁殖記録を報告している。今回の調査では2000年8月（夏季）の調査で野甫島において数個体が観察され、その観察時に小学校校舎の換気孔に入り出し、巣材を運んでいる様子が確認された。しかしながら、島に滞在する期間が短いため、その後の抱卵や育雛行動等一連の繁殖活動については未確認である。本種はおそらく野補島でも繁殖活動を行っている可能性が高いものと思われる。なお、本報告では育雛行動を確認していないので、本種を暫定的に冬鳥として扱った。

伊平屋島及び伊是名島における貴重種の確認と鳥類の生息地保全について

伊平屋島・伊是名島では絶滅種として日本固有種のリュウキュウカラスバトがあげられる。本種は森林地域に生息していたものと考えられているが、沖縄諸島では1928年までの採集記録が知られている（環境省編 2002）。したがって、それ以降観察されることがなく絶滅と考えられている。

これまで両島で観察された鳥類の中で絶滅のおそれのある保護すべき鳥類としては、国や県指定の天然記念物指定種や、環境省編（2002）により選定されている「日本の絶滅のおそれのある野生生物（改訂）鳥類編」や沖縄県自然保護課編（1996）によつて選定された「沖縄県における絶滅のおそれのある野生生物」の中に掲載されている貴重種としては、28種が確認された（表4）。したがって、これらの種が激減もしくは絶滅しないようその生息地の保全に努め、島における人為的な改変は極力さけるようすべきであろう。そうすることで、両島で確認されている他の鳥類を含め、われわれ人間側にとっても生活空間としての豊かな自然環境を保全・維持することができるものと思われる。また、こうした豊かな自然環境は、最近地域活性化の目玉として登場してきたエコミュージアムやエコツーリズムへの活用が期待できるとともに、学校教育における理科教育や環境教育等に活用できるものと思われる。

<引用文献>

- 新垣秀雄. 1971. 伊平屋島及び野補島の鳥類相. 鳥9号. 沖縄鳥類保護協会. p.20-29.
- Dougl M., H. Ikenaga, H. Iozawa, M. Shoyama, and K. Takehara. 1996. A check-list of the birds of Okinawa Prefecture with notes on recent status including hypothetica records. bull Okinawa Pref Mus. (22): 33-152.
- 比嘉邦昭. 1976. 私が見た沖縄島南部の珍鳥. 野鳥(41). 日本野鳥の会. p34.
- 比嘉邦昭. 2002. 伊是名島のRDB鳥類生息調査. 平成12年度沖縄県版レッドデータブック補足調査委託業務報告書. 沖縄県文化環境部自然保護課. 116-133.
- 樋口広芳. 1979. 島にすむ鳥の生態. サイエンス. 9(8).74-88.
- 伊平屋村役場編. 1994. '94伊平屋村村勢要覧. 73pp.
- 梶田学・真野徹・佐藤文男. 2002. 沖縄島に生息するウグイス *Cettia diphone* の二型について—多変量解析によるリュウキュウウグイスとダイトウウグイスの再評価—. 山階鳥類研究所研究報告 33:148-167.
- 木崎甲子郎. 1985. 琉球弧の地質誌. 沖縄タイムス. pp.85-91.
- Kuroda, NM. 1925. A contribution to the knowledge of the avifauna of the Riu Kiu Islands and the vicinity published by the author, Tokyo.
- 環境省自然環境局野生生物課. 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2鳥類. 自然環境研究センター, 東京.
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- Ogawa M. 1905. Notes on Mr. Alan Owston's collection of birds from the Islands lying between Kiushu and Formosa. Ann. Zool. Jap. V:175-232.
- 沖縄県環境保健部自然保護課(編). 1996. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.
- 沖縄県環境保健部自然保護課(編). 1997. 特殊鳥類

- 生息環境調査 伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島湿地編. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.
- 沖縄野鳥研究会(編). 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会, 沖縄.
- 沖縄野鳥研究会(編). 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇.
- 嵩原建二・原戸鉄二郎 1996. 伊江島の鳥類相について. 文化課紀要第8号: 沖縄県教育委員会文化課. 51-69.
- 嵩原建二. 1993. 沖縄島北部地域（国頭村・大宜味村・東村）の鳥類について. 特殊鳥類等生息環境調査VI. 沖縄県環境保健部自然保護課. pp.59-92.
- 嵩原建二. 1994. リュウキュウオオコノズク *Otus bakkamoema pryeri* の地上営巣について. すぐみち第11号. 今帰仁村立文化センター.
- 嵩原建二. 2002. 沖縄島で留鳥として生息する希少な3亜種の繁殖記録について. 沖縄県立博物館紀要 (28) 1-11.
- 田中聰・嵩原建二. 2003. 先島諸島における野生化したクジャクの分布と現状について. 沖縄県立博物館 紀要 (29):19-24.

図版 I . 伊平屋島及び伊是名島の環境景観

(1) 伊平屋島

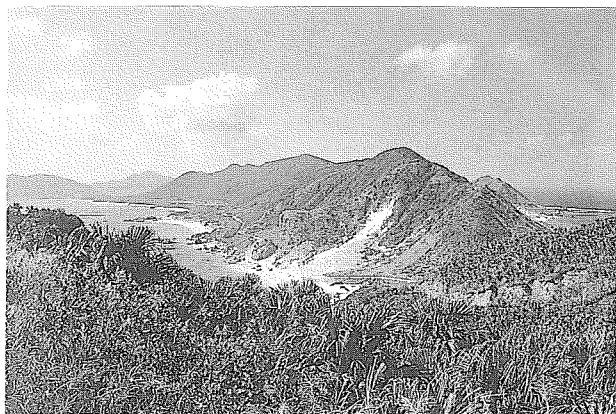


写真 1 . 伊平屋島の山並み
(北側からタンナ岳・後岳・アサ岳と続く)



写真 2 . 田名水田

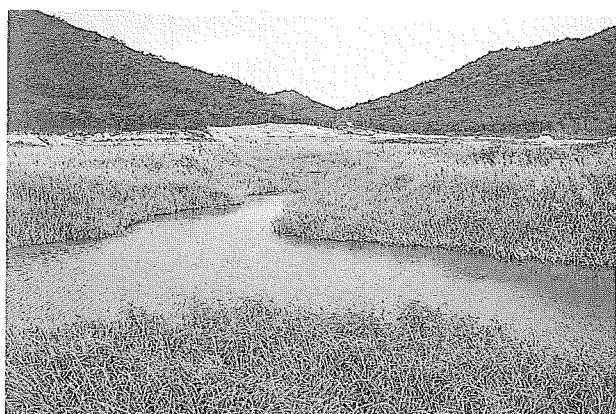


写真 3 . 田名湿地

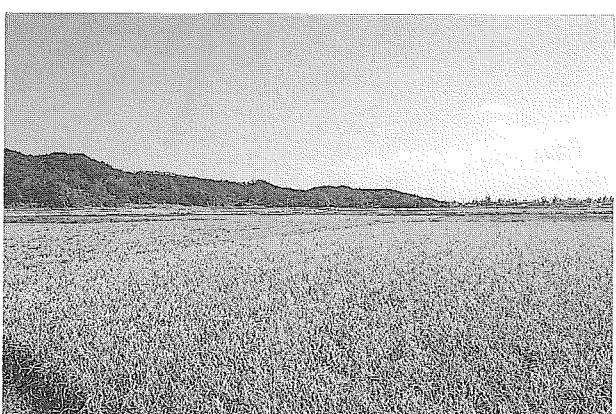


写真 4 . 我喜屋水田

(2) 伊是名島

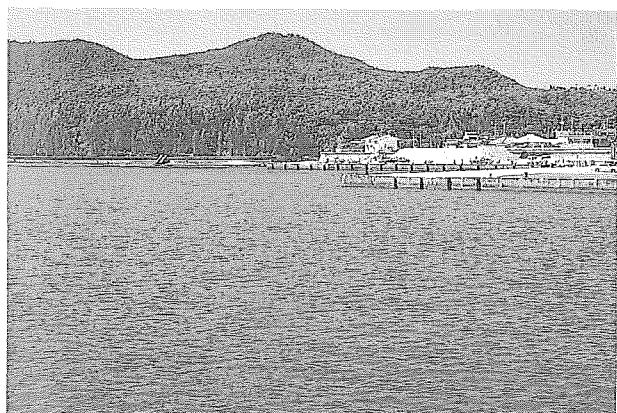


写真 5 . 仲田港とチヂン山



写真 6 . 伊是名水田

図版Ⅱ. 伊平屋島・伊是名島で確認された鳥類



写真7. カラスバト



写真8. ズアカアオバト



写真9. ムラサキサギ



写真10. コウライキジ（外来種）

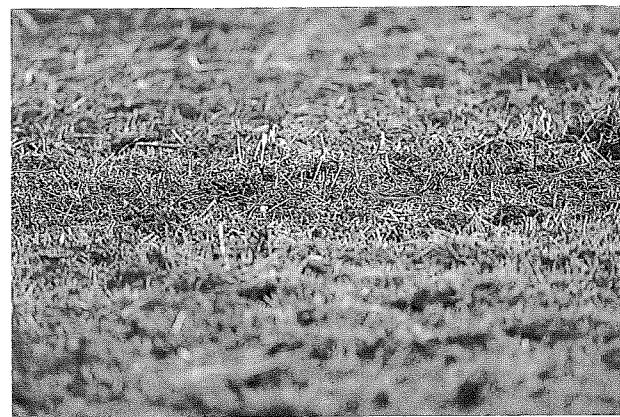


写真11. ヒバリ

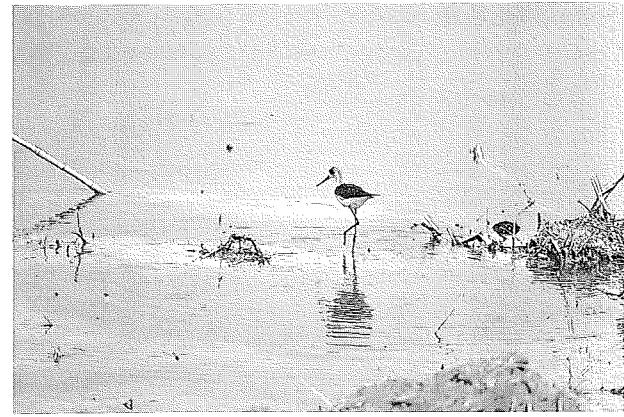


写真12. セイタカシギ

伊平屋島・伊是名島の鳥類目録(2004)

凡例 : R : 留鳥 S : 夏鳥 T : 旅鳥 W : 冬鳥 ST : 迷鳥 * : 初確認

和 名	学 名	生息現状・特記事項等	伊平屋	伊是名	文献等
	カイツブリ目 PODICIPEDIFORMES				
	カイツブリ科 PODICIPEDIDAE				
カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis poggei</i>	R	◎	◎	
1996/11/3	島尻西側ため池(1)				
1998/10/15	諸見水田(2)				
2003/11/22	田名湿地(2)				
	ミズナギドリ目 PROCELLARIFORMES				
	アホウドリ科 DIOMEDEIDAE				
コアホウドリ	<i>Diomedea immutabilis</i>	ST		◎	
1982/3/11	伊是名(1)			a	
	ペリカン目 PELECANIFORMES				
	ウ科 PHALACROCORACIDAE				
カワウ *	<i>Phalacrocorax carbo hanedae</i>	W			
1998/10/13~10/18	伊是名(1)			◎	
ウミウ *	<i>Phalacrocorax capillatus</i>		◎		
2004/1/1	伊平屋島北海岸				
	コウノトリ目 CICONIIFORMES				
	サギ科 ARDEIDAE				
サンカノゴイ	<i>Botaurus stellaris</i>	W(まれ)	◎		
1984/5/4	伊平屋(1)			a	
ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax nycticorax</i>	W,あるいはR	◎	◎	
1984/2/3	伊平屋(1)			a	
1996/11/3	2.田名川河口近く(1若)				
1984/11/23~11/25	伊平屋(2)			a	
1998/10/13~10/18	伊是名仲田の池				
ササゴイ	<i>Butorides striatus amurensis</i>	W	◎	◎	
1984/5/4	伊平屋			a	
1996/11/3	田名川河口近く(2)				
1998/10/13~10/18	伊是名				
アカガシラサギ	<i>Ardeola bacchus</i>	W(まれ)	◎	◎	e
1996/11/2	田名川河口近く(1)				
2001/4/27	勢理客(1)			c	
.リュウキュウヨシゴイ	<i>Ixobrychus cinnamomeus</i>	R	◎	◎	e
	伊是名	(名嘉私信)			
1996/11/3	田名湿地(1)				
アマサギ	<i>Bubulcus ibis coromandus</i>	T/W	◎	◎	e
1984/2/3-2/5	伊平屋			a	
1996/11/3	田名水田(1)				
1998/10/13~10/18	伊是名				
ダイサギ	<i>Ardea alba modesta</i>	W	◎	◎	e
1984/2/3-2/5	伊平屋島				
1996/11/3	田名水田(1)				

1996/11/3	田名湿地(1)				
1996/11/3	田名川河口近く(2)				
1998/10/13~10/18	伊是名				
チュウサギ	<i>Egretta intermedia intermedia</i>	W	◎	◎	e
1984/2/	伊平屋				a
1996/11/3	田名水田(1)				
1996/11/3	田名湿地(1)				
1998/10/13~10/18	伊是名				
コサギ	<i>Egretta garzetta garzetta</i>	W	◎	◎	e
1984/2/	伊平屋				a
1996/11/3	田名水田(1)				
1998/10/13~10/18	伊是名				
1998/10/13~10/18	伊是名				
クロサギ	<i>Egretta sacra sacra</i>	R	◎	◎	e
1996/11/3	田名川河口近く(2)				a
1998/10/13~10/18	伊是名				
アオサギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i>	W	◎	◎	e
1984/5/	伊平屋				
1996/11/3	田名湿地(1)				
1996/11/3	田名川河口近く(2)				
1998/10/13~10/18	伊是名				
ムラサキサギ	<i>Ardea purpurea manilensis</i>	R(漂鳥:まれ)	◎		
1984/5/4	伊平屋				a
1996/12/22	伊平屋田名湿地				e
	ガンカンモ目 ANSERIFORMES				
	ガンカモ科 ANATIDAE				
コハクチョウ	<i>Cygnus columbianus jankowskyi</i>	S T	◎		
1981/11/2	伊是名				a
オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	W	◎		
1984/11/23	伊平屋				a
2003/11/25	田名水田ため池(3)				
マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	W	◎	◎	
1984/5/4	伊平屋				a
1996/11/2	田名湿地(6)				
1998/10/15	伊是名畜産センター				
カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha zonorhyncha</i>	R	◎	◎	
1904/5/16	伊平屋	♀ 1			b
1984/5/4	伊平屋(4)	雛確認(繁殖)			a
1996/11/2	10.田名湿地				
1998/10/13~10/18	伊是名				
コガモ	<i>Anas crecca crecca</i>	W	◎	◎	
1984/2/3~2/5	伊平屋				a
1996/11/2	田名湿地(100)				
1998/10/13~10/18	伊是名				
.ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>	W	◎	◎	e
1984/11/23~11/23	伊平屋				

1996/11/3	田名湿地(3)			
1998/10/13~10/18	伊是名			
オカヨシガモ	<i>Anas strepera</i>	W	◎	
1984/11/23~11/23	伊平屋			a
シマアジ	<i>Anas querquedula</i>	W	◎	◎
1998/10/13~10/18	伊是名ビーチ北方池			c
オナガガモ	<i>Anas acuta</i>	W	◎	◎ e
1984/11/23~11/23	伊平屋			
1996/11/3	前岳ダム			
1998/10/13~10/18	伊是名			
ハシビロガモ *	<i>Anas clypeata</i>	W	◎	
1998/10/13~10/18	伊是名			
スズガモ	<i>Aythya marila</i>	W	◎	
2001/1/2	伊是名ビーチ北方池			c
ホシハジロ *	<i>Aythya ferina</i>	W	◎	
1998/2/9	伊是名			
キンクロハジロ *	<i>Aythya fuligula</i>	W	◎	
1984/11/23~11/25	伊平屋			
	タカ目 FALCONIFORMES			
	タカ科 ACCIPITRIDAE			
ミサゴ	<i>Pandion haliaetus haliaetus</i>	W	◎	◎
1996/11/3	1.前岳ダム			
1996/11/3	1.腰岳林道			
1984/11/23~11/25	伊平屋			
1998/10/15	伊是名内花			
アカハラダカ *	<i>Accipiter soloensis</i>	T	◎	
	伊平屋腰岳・我喜屋			
ツミ	<i>Accipitaer gularis gularis</i>	R	◎	◎ e
1996/11/3	野甫島南			
1984/11/23~11/25	伊平屋			
1998/10/15	伊是名勢理客			
オオノスリ *	<i>Buteo hemilasius</i>	S T	◎	
1999/9/28	伊平屋			
ケアシノスリ	<i>Buteo logopus menzbieri</i>	W	◎	
1984/2/3~2/5	伊平屋			a
サシバ	<i>Butastur indicus</i>	T/W	◎	◎ e
1996/11/3	腰岳林道			
1984/11/23~11/25	伊平屋			
1998/10/15	伊是名内花			
ハイイロチュウヒ	<i>Circus cyaneus cyaneus</i>	W	◎	
1985/11/2	伊平屋			a
チュウヒ *	<i>Circus spilonotus spilonotus</i>	W	◎	
2000/9/22	伊平屋田名湿地			
1999/9/29	伊平屋			
	ハヤブサ科 FALCONIDAE			
チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus interstinctus</i>		◎	◎ e

	1996/11/2	田名湿地	W			
	1998/10/13~10/18	伊是名				
ハヤブサ		<i>Falco peregrinus japonensis</i>		◎		
	2001/4/28	伊是名	W		c	
		キジ科 PHASIANIDAE				
コウライキジ		<i>Phasianus colchicus karpowi</i>	R(外来種)	◎		
	1998/10/13~10/18	伊是名				
		ツル目 GRUIFORMES				
		ミフウズラ科 TURNICIDAE				
ミフウズラ		<i>Turnix suscitator okinavensis</i>	R	◎	◎	
	1984/2/3~2/5	伊平屋			a	
	1998/10/13~10/18	伊是名				
		クイナ科 RALLIDAE				
リュウキュウヒクイナ		<i>Porzana fusca phaeopyga</i>	R	◎	◎	
	1996/12/22	田名湿地(1)				
	2001/4/28	伊是名畜産センター			c	
シロハラクイナ *		<i>Amaurornis phoenicurus chinensis</i>	R	◎	◎	
	2003/11/25	田名湿地(1、若鳥)				
	1998/10/13~10/18	伊是名				
バン		<i>Gallinula chloropus indica</i>	R	◎	◎	e
	1996/11/3	田名湿地				
	1996/11/3	田名川河口近く				
	1998/10/13~10/18	伊是名				
オオバン		<i>Fulica atra</i>	W	◎	e	
	1984/11/23	伊平屋			a	
	1996/11/3	4.田名湿地				
		チドリ目 CHRADRIIFORMES				
		チドリ科 CHARADRIIDAE				
コチドリ		<i>Charadrius dubius curonicus</i>	W	◎	◎	e
	1984/11/23	伊平屋			a	
	1996/11/3	8.田名水田				
	1998/10/13~10/18	伊是名				
シロチドリ		<i>Charadrius alexandrinus nihonensis</i>	R	◎	◎	e
	1904/5/15	伊平屋	♂1		b	
	1904/4,5	伊是名	♀1,♂3		b	
	1984/5/4	伊平屋			a	
	1996/11/3	前泊漁港				
	1996/11/3	野甫漁港				
	1998/10/13~10/18	伊是名				
メダイチドリ		<i>Charadrius mongolus stegmanni</i>	T/W	◎	◎	
	1984/11/23	伊平屋			a	
	1998/10/13~10/18	伊是名				
オオメダイチドリ		<i>Charadrius leschenaultii</i>	T		◎	
	1998/10/13~10/18	伊是名				
ムナグロ		<i>Pluvialis dominica fulva</i>	T/W	◎	◎	
	1984/2/3~2/5	伊平屋			a	

1998/10/13～10/18	伊是名			
ダイゼン *	<i>Pluvialis Squatarola</i>	W	◎	
1998/10/13～10/18	伊是名			
タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>		◎	◎
1984/2/3～2/5	伊平屋	W		a
2001/1/1	伊是名畜産センター			c
2003/11/25	伊平屋我喜屋水田(1)			
	シギ科 SCOLOPACIDAE			
キヨウジョシギ	<i>Arenaria interpres interpres</i>	T	◎	◎
1904/5/11	伊平屋	♀1、♂1		b
1984/3/3	伊平屋			
2001/1/1	伊是名ゴハ崎			c
トウネン *	<i>Calidris ruficollis</i>	W	◎	
1998/10/13～10/18	伊是名			
オジロトウネン *	<i>Calidris temminckii</i>		◎	
1998/10/13～10/18	伊是名	W		
ヒバリシギ *	<i>Calidris subminuta</i>		◎	◎
2000/5/4	伊平屋			
1998/10/13～10/18	伊是名			
ハマシギ	<i>Calidris alpina sakhalina</i>	W	◎	
1998/10/13～10/18	伊是名			
ウズラシギ	<i>Calidris acuminata</i>		◎	
1998/10/13～10/18	伊是名	T		
アカアシシギ	<i>Tringa totanus ussuricensis</i>		◎	
1999/9/28	伊是名畜産センター	W		
2001/1/1	伊是名畜産センター			c
エリマキシギ *	<i>Philomachus pugnax</i>	T	◎	
2000/8/24	伊平屋			
アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>	W	◎	◎
1984/5/4	伊平屋			a
1998/10/13～10/18	伊是名			
コアオアシシギ	<i>Tringa stagnatilis</i>	W	◎	
2001/4/27	伊是名勢理客			c
クサシギ	<i>Tringa ochropus</i>	W	◎	◎ e
1996/11/3	田名川河口近く			
1998/10/13～10/18	伊是名			
タカブシギ	<i>Tringa glareola</i>	W	◎	◎ e
1998/10/13～10/18	伊是名			
1999/9/28	伊是名			
2000/8/24	伊平屋			
キアシシギ	<i>Tringa brevipes</i>	T	◎	◎
1904/5/10,5/11	伊是名	♂1,♂1		b
1984/5/3	伊平屋			a
1998/10/13～10/18	伊是名			
イソシギ	<i>Triga hypoleucus</i>	W	◎	◎
1904/4/22,5/12	伊是名	♂1、♀1		b

1996/11/3	7.田名川河口近く				
1998/10/13~10/18	伊是名				
ソリハシシギ *	<i>Xenus cinerus</i>	T		◎	
1998/10/13~10/18	伊是名				
オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica baueri</i>			◎	
2001/1/1	伊是名ゴハ崎南西海岸	T/W		c	
ホウロクシギ				◎	
2001/1/1	伊是名打鼻南西海岸			c	
チュウシャクシギ	<i>Numenius phaeopus variegatus</i>	T/W		◎	
1998/10/13~10/18	伊是名				
1999/9/28	伊是名				
ヤマシギ *	<i>Scolopax rusticola</i>		◎	◎	
2003/11/25	田名水田・念頭平松	W			
1998/10/13~10/18	伊是名				
アマミヤマシギ	<i>Scolopax mira</i>	R? (W)	◎		
	伊平屋島	(比嘉邦昭氏私信)			
タシギ	<i>Gallinago gallinago gallinago</i>	W	◎	◎	e
2003/11/25	伊平屋島				
1998/10/13~10/18	伊是名				
	セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE				
セイタカシギ *	<i>Himantopus himantopus himantopus</i>	W	◎	◎	
1998/10/13~10/18	伊是名				
2003/11/23	伊平屋島田名水田				
	ツバメチドリ科				
ツバメチドリ *	<i>Glareola maldivarum</i>	T/W		◎	
2001/1/1	伊是名畜産センター				
	カモメ科 LARIDAE				
クロハラアジサシ *	<i>Sterna hybrida javanica</i>	T	◎		
2000/5/4	田名湿地				
1998/10/13~10/18	伊是名				
オオアジサシ *	<i>Thalasseus bergii crestatus</i>	S	◎		
1999/9/28	伊平屋				
ベニアジサシ *	<i>Sterna dougallii bangsi</i>	S	◎	◎	
1999/9/28	伊平屋島				
1999/9/29	伊是名				
エリグロアジサシ *	<i>Sterna sumatrana sumatrana</i>	S	◎		
2000/8/24	米崎海岸(2)				
コアジサシ *	<i>Sterna albifrons</i>		◎		
	伊平屋島北海岸(繁殖)				
	ハト目 COLUMBIFORMES				
	ハト科 COLUMBIDAE				
リュキュウキジバト	<i>Streptopelia orientalis stimpsoni</i>	R	◎	◎	e
2003/11/25	伊平屋腰岳・田名水田				
1998/10/13~10/18	伊是名				
リュキュウアカオバト *	<i>Treron formosae permagnus</i>		◎		
1998/10/13~10/18	伊是名				

2003/11/25	腰岳林道	雛 2			
1998/10/13~10/18	伊是名				
カラスバト	<i>Columba janthina</i>	R	◎	◎	
2003/11/25	腰岳林道				
2001/4/28	伊是名勢理客			c	
リュウキュウカラスバト	<i>Columba janthina</i>	R (絶滅)	◎	◎	
1904/5/16	伊平屋♀ 1			b	
1904/4,5,6	伊是名数個体			b	
	ホトトギス目 CUCULIFORMES				
	ホトトギス科 CUCULIDAE				
カッコウ *	<i>Cuculus canorus telephonus</i>	T	◎		
2001/5/20	伊平屋				
ツツドリ *	<i>Cuculus saturatus</i>		◎		
2001/5/20	伊平屋島前岳・後岳				
ホトトギス *	<i>Cuculus poliocephalus poliocephalus</i>	T	◎		
1985/8/1	伊平屋				
	フクロウ目 STRIGIFORMES				
	フクロウ科 STRIGIDAE				
トラフズク	<i>Asio otus otus</i>	W	◎	e	
1996/12/7	田名湿地			g	
リュウキュウコノハズク	<i>Otus scops elegans</i>		◎	◎	e
1996/11/2	伊平屋	R			
2001/4/28	伊是名ビーチキャンプ場			c	
リュウキュウアオバズク	<i>Ninox scutulata totogo</i>	R	◎	◎	
1996/11/2	伊平屋	繁殖確認			
2001/4/28	伊是名打鼻			c	
	ヨタカ目 CAPRIMULGIFORMES				
	ヨタカ科 CAPRIMULGDAE				
ヨタカ *	<i>Caprimulgus indicus</i>	W		◎	
1999/9/29	伊是名				
	アマツバメ目 APODIFORMES				
	アマツバメ科 APODIDAE				
アマツバメ *	<i>Apus pacificus kurodae</i>	T	◎		
	伊平屋				
	ブッポウソウ目 CORACTIFOMES				
	カワセミ科 ALCEDINIDAE				
ヤマショウビン *	<i>Halcyon pileata</i>	T	◎		
	西銘伸助氏私信				
アカショウビン	<i>Halcyon coromanda major</i>	S	◎	◎	
1904/4/28	伊是名	♂ 1		b	
1904/5/17	伊平屋	♀ 1		b	
カワセミ	<i>Alcedo atthis bengalensis</i>	R	◎	◎	e
1904/4/23,5/9	伊是名	♂ 3		b	
1984/11/23~11/25	伊平屋			a	
1996/11/3	2.田名湿地				
1996/11/3	1.田名川河口近く				

1998/10/13~10/18	伊是名			
	ブッポウソウ科 CORACIIDAE			
ブッポウソウ *	<i>Eurystomus orientalis calonyx</i>		◎	
1999/9/28	伊平屋腰岳林道	T		
	ヤツガシラ科 UPUPIDAE			
ヤツガシラ	<i>Upupa epops saturata</i>	T	◎	
	伊平屋			d
	スズメ目 PASSERIFORMES			
	ヒバリ科 ALAUDIDAE			
ヒバリ	<i>Alauda arvensis japonica</i>	W	◎	
1984/2/3-2/5	伊平屋島			a
2003/11/25	田名水田(5)			
	ツバメ科 HIRUNDINIDAE			
ショウドウツバメ *	<i>Riparia riparis ijimae</i>	T	◎	
1985/11/3	伊平屋			
ツバメ	<i>Hirundo rustica gutturalis</i>	T/W	◎	◎
1998/10/13~10/18	伊是名			
1999/9/28	伊平屋			
リュウキュウツバメ	<i>Hirundo tahitica namiyei</i>	R	◎	◎ e
2000/5/4	田名水田(8)			
1998/10/13~10/18	伊是名			
コシアカツバメ *	<i>Hirundo daurica</i>	T	◎	
1985/11/2~11/4	伊平屋			
イワツバメ *	<i>Delichon urbica dasypus</i>	T	◎	
1985/11/2~11/4	伊平屋			
	セキレイ科 MOTACILLIDAE			
ツメナガセキレイ *	<i>Motacilla flava</i>	T/W	◎	◎
1998/10/13~10/18	伊是名			
2000/5/4	田名水田(1)			
キセキレイ	<i>Motacilla cinerea robusta</i>	W	◎	◎ e
2003/11/25	田名水田(5)			
1998/10/13~10/18	伊是名			
ハクセキレイ	<i>Motacilla alba lugens</i>	W	◎	◎ e
1998/10/13~10/18	伊是名			
2003/11/25	田名水田(5)			
ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	W	◎	◎ e
2000/5/4	腰岳林道			
2001/4/27	伊是名大城山			c
セジロタヒバリ *	<i>Anthus gustavi gustavi</i>	W		◎
1998/10/13~10/18	伊是名			
マミジロタヒバリ	<i>Anthus novaeseelandiae sinensis</i>	W	◎	◎
1985/11/2	伊平屋			a
1998/10/13~10/18	伊是名			
ムネアカタヒバリ	<i>Anthus ceevinus</i>	W	◎	◎
1982/4/24	伊平屋			a
1998/10/13~10/18	伊是名			

	2001/4/28	伊是名畜産センター				c
タヒバリ		<i>Anthus spinoletta</i>	W	◎	◎	
	1984/2/3~2/5	伊平屋				a
	2001/4/28	伊是名畜産センター				c
		ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE				
シロガシラ		<i>Pycnonotus sinensis</i>	(未定着)	◎		d
	1971/5	伊平屋				
ヒヨドリ		<i>Hypsipetes amaurotis amaurotis</i>	W	◎	◎	
	1999/9/29	伊平屋腰岳林道(20+)				
	2001/1/1	伊是名内花				c
リュキュウヒヨドリ		<i>Hypsipetes amaurotis pryeri</i>	R	◎	◎	e
	1904/5/15,5/17	伊平屋	♂ 3			b
	1998/10/13~10/18	伊是名				
		モズ科 LANIIDAE				
シマアカモズ		<i>Lanius cristatus lucionensis</i>	W	◎		e
	2000/5/4	田名水田				
		ツグミ科 TURDINAE				
ホントウアカヒゲ		<i>Erithacus komadori namiyei</i>	R?(現状不明)	◎		d
	1971/5	伊平屋				
ジョウビタキ		<i>Phoenicurus auroreus auroreus</i>		◎	◎	e
	1984/11/23~11/25	伊平屋				
	2001/1/1	伊是名集落				c
ノゴマ		<i>Luscinia calliope</i>	W	◎		
	2001/1/1	伊是名勢理客・内花・打鼻他				c
ルリビタキ		<i>Tarsiger cynurus</i>	W	◎		
	1996/12/7	2(雌).腰岳林道				g
ノビタキ		<i>Saxicola torquata</i>	W	◎	◎	
	1985/11/3	伊平屋				a
	1996/12/7	1(雌).田名水田				
	1998/10/13~10/18	伊是名				
	2003/11/22	伊平屋				
イソヒヨドリ		<i>Monticola solitarius philippensis</i>	R	◎	◎	e
	1998/10/13~10/18	伊是名				
	2003/11/22	伊平屋				
シロハラ		<i>Turdus pallidus</i>	W	◎	◎	e
	1971/5	伊平屋				
	2003/11/22	伊平屋腰岳				
	2001/1/1-1/2	伊是名				c
アカハラ *		<i>Turdus chrysolaus</i>		◎		
		伊平屋				
ツグミ		<i>Turdus naummanni eunomus</i>	W	◎	◎	
	1996/11/3	2.米崎海岸				
	2001/1/3	伊是名				c
.トラングミ *		<i>Zoothera dauma</i>	W	◎		
		伊平屋				
		ウグイス科 SYLVIIINAE				

ヤブサメ *	<i>Cetta squameiceps</i>	W	◎		
	伊平屋				
ウグイス	<i>Cetta diphone cantans</i>	W	◎	◎	e
1996/12/22	伊平屋				
1999/9/29	伊是名				
ウグイスの1亜種	<i>Cettia diphone sp.</i>	R	◎	◎	
2003/11/22	伊平屋				
1998/10/13~10/18	伊是名				
オオヨシキリ	<i>Acrocephalus arundinaceus orientalis</i>	W	◎		
1996/12/22	田名湿地(1)				e
セッカ	<i>Cisticola juncidis brunneiceps</i>	R	◎	◎	
1904/5/17	伊平屋	♀ 1			b
1904/5/20	伊是名	♂ 1			b
2003/11/22	伊平屋				
1998/10/13~10/18	伊是名				
キマユムシクイ *	<i>Phylloscopus inornatus inornatus</i>	W	◎	◎	
2003/11/25	腰岳林道				
1998/10/13~10/18	伊是名				
メボソムシクイ *	<i>Phylloscopus borealis</i>	W	◎	◎	
1985/11/3	伊平屋				
1996/12/22	腰岳林道				
1998/10/13~10/18	伊是名				
	ヒタキ科MUSCICAPIDAE				
エゾビタキ *	<i>Muscicapa griseisticta</i>	T	◎	◎	
1998/10/13~10/18	伊是名				
2000/5/4	伊平屋				
キビタキ	<i>Ficedula narcissina narcissina</i>	W	◎		e
1996/11/4	1.腰岳林道				
	カササギヒタキ亜科 MONARCHINAE				
リュウキュウサンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	S	◎	◎	
1904/5/15,5/17	伊平屋	♀, ♂			b
1904/5/20	伊是名	♀ 1			b
2001/4/28	伊是名診療所・勢理客・畜産センター				c
	メジロ科 ZOSTEROPIDAE				
リュウキュウメジロ	<i>Zosterops japonica loochooensis</i>	R			e
1904/5/17	伊平屋	♂ 1			b
	ホオジロ科 EMBERIZIDAE				
ホオアカ	<i>Emberiza fucata fucata</i>	W			e
1996/11/3	2.田名湿地				a
ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans elegans</i>	W			
1984/2/3~2/5	伊平屋				a
2003/11/22	我喜屋				
アオジ	<i>Emberiza spodocephala personata</i>	W		◎	e
2001/1/2	伊是名ビーチ北				
カシラダカ	<i>Emberiza rustica latifascia</i>	W	◎	◎	
	伊平屋				e

1998/10/13～10/18	伊是名				
	アトリ科 FRINGILLIDAE				
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes japonicus</i>	W	◎	◎	e
1996/11/3	2.田名湿地				
1996/11/3	5.田名川河口近く				
2001/1/2	伊是名尚円王御庭公園				c
アトリ *	<i>Fringilla montifringilla</i>	W	◎		
1996/12/22	1(雌).腰岳林道				
マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	W	◎		
	伊平屋				e
オオカワラヒワ	<i>Carduelis sinica kawarahiwa</i>	W	◎		e
1996/11/3	16.田名湿地				
	ハタオリドリ科 PLOCEIDAE				
スズメ	<i>Passer montanus saturatus</i>	R	◎	◎	e
	ムクドリ科 STURNIDAE				
コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	T	◎	◎	
1984/5/3	伊平屋				
2001/4/27	伊是名勢理客・内花				c
ムクドリ *	<i>Sturnus cineraceus</i>	W/R	◎		
1984/11/23	野甫小学校	営巣			
2000/5/5	伊平屋				
1996/11/3	2.米崎海岸				
	カラス科CORVIDAE				
ミヤマガラス	<i>Corvus frugilegus pastinator</i>	W	◎		f
1985/11/2～11/4	伊平屋				a
リュウキュウハシブトカラス	<i>Corvus macrorhynchos connectens</i>	R	◎	◎	
2001/4/28	伊是名大野山				c
	カエデチヨウ科				
アミハラ	<i>Lonchura punctulata</i>	R(外来種)	◎	◎	e
1996/11/3	4.田名湿地				
1998/10/13～10/18	伊是名				
1999/9/28	伊是名				
合計	150				

備考：引用文献

- a : Duglsら (1996)
- b : Ogawa (1905)
- c : 比嘉 (2002)
- d : 新垣 (1971)
- e : 沖縄県自然保護課編 (1997)
- f : 沖縄野鳥研究会 (1986)
- g : 沖縄野鳥研究会 (2002)

西表島山地林におけるトカゲ類の活動について

仲地 明*・田中 聰**

Activity of Lizards in a Subtropical Forest on Iriomotejima Island, the Southern Ryukyus

Akira NAKACHI* and Satoshi TANAKA**

はじめに

西表島において個体群密度の高い昼行性のトカゲ類は、肉食性動物の餌動物としても、昆虫等の捕食動物としても、生物群集のなかで重要な役割を演じているものと思われる。しかしながら、これまで西表島のトカゲ類についての生態学的研究はきわめて乏しい (e.g., Tanaka, 1986a, b)。自然のなかで、動物の種間関係は、動物どうしの直接的な遭遇がなければ生じないことが多い。そのため、どの種がどれだけ生息しているかということだけでなく、どの時間帯にどの程度の個体が活動しているのか、どのような動きをするのか、また、どのような微細生息場所を利用するのかという情報は種間の関わりを明らかにする上でも重要である。

一般に、動物の日周活動はおおよそ昼行性・夜行性および薄明薄暮性に分類される。しかしながら、日中や夜間という時間帯の中でも、個々の種の日周活動はさまざまな外的・内的要因に影響を受けるため (e.g., Rose, 1981; Tanaka and Nishihira, 1987)、時期や場所により異なるパターンを示すことがある (e.g., Vitt and Colli, 1994)。そのため、個々の種の活動パターンは時期や場所の違いを考慮した上で調べなければならない。

西表島からは、外来種をふくめてこれまで11種のトカゲ類が記録されている (Ota, 1990; 当山, 1985)。調査場所には6種のトカゲ類 (サキシマキノボリトカゲ *Japalura polygoanta ishigakiensis*、サキシマカナヘビ *Takydromus dorsalis*、イシガキトカゲ *Eumeles stimpsonii*、キシノウエトカゲ *Eumeles*

kishinouyei、サキシマスベトカゲ *Scincella boettgeri*、ミナミヤモリ *Gekko hokouensis*) が生息しているが (写真1～7)、今回は、夜行性のミナミヤモリをのぞく5種を調査の対象とした。結果は十分なものではないが、本報ではセンサス上の問題点およびトカゲ類の活動時間帯に影響する要因について若干の考察をおこなう。

調査地と方法

西表島は面積289.27km²、周囲130.0kmの比較的大きな島で、海岸線や一部の地域をのぞけば島の大部分は常緑広葉樹林におおわれている。今回調査した場所は、西表島東部古見の山地で、イタジイ *Castanopsis sieboldii*、オキナワウラジロガシ *Quercus miyagii*、イヌビワ類 *Ficus* spp.、アカギ *Bischoffia javanica*、ショウベンノキ *Turpinia ternata*、モクタチバナ *Ardisia sieboldii*などが生育する比較的若い森林であった。森林内にある幅1mほどの既存の林道 (横断道路) で (写真8)、仲地がセンサスをおこなった。センサスルートの距離は計測していないが、始点と終点は固定されており、各センサスで距離は変わらない (推定350m程度)。昼行性のトカゲ類にとって、天気は活動を大きく左右することが予想されるため、センサスは晴れた日 (1982年7月20日, 25日および10月12日) に実施した。夜明けから区切りの良い時刻として、7月には7時30分から、10月には7時からセンサスを開始した。毎時、始点 (標高約50m) から麓の方向へ向かい、終点までを1回のセンサスとした。終点到着後、

* 〒902-0064 沖縄県那覇市寄宮1-2-16 沖縄県立図書館
Okinawa Prefectural Library, 1-2-16, Yorimiya, Naha, Okinawa 902-0064, Japan

** 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館
Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

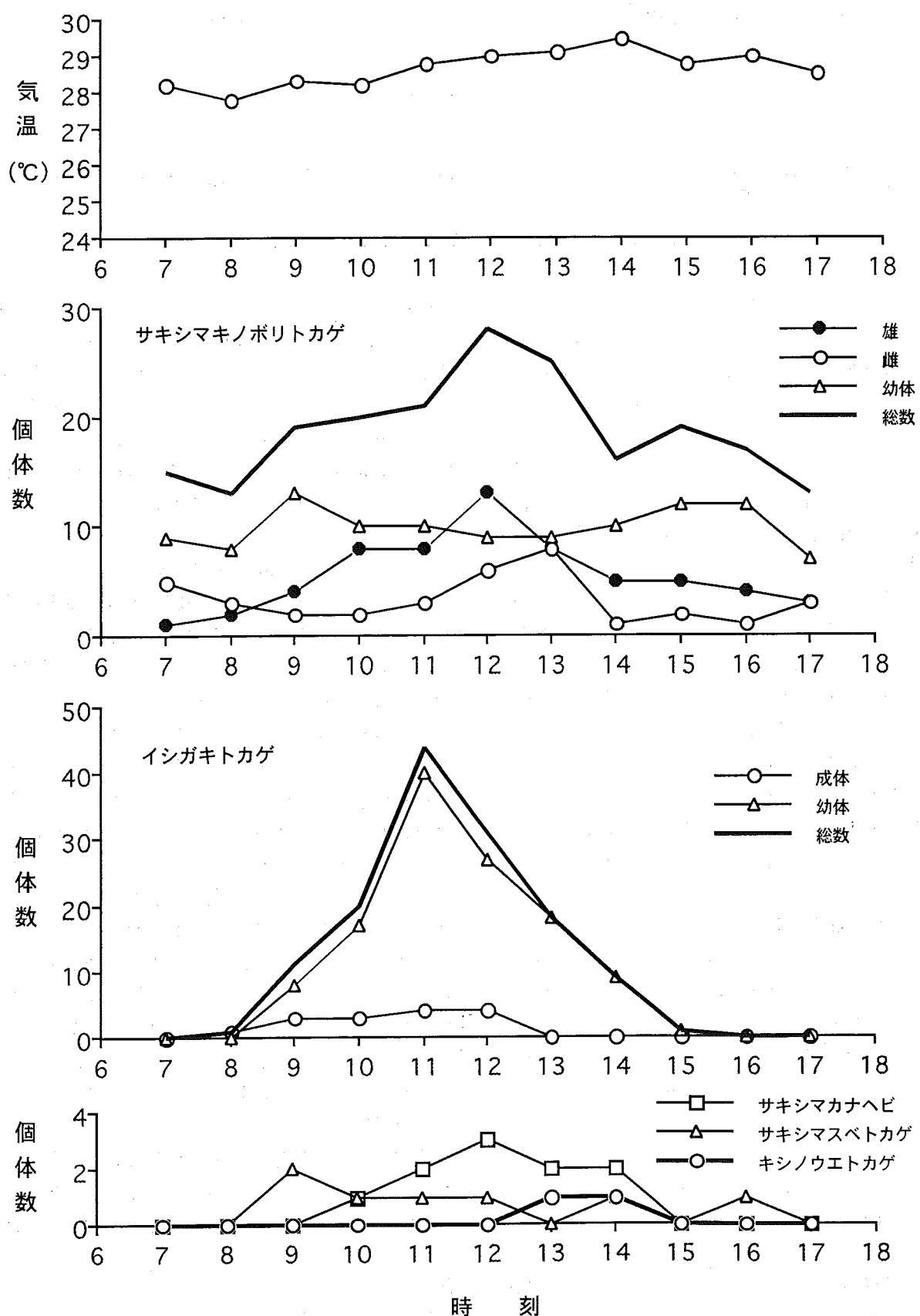


図1 西表島におけるトカゲ類の目撃個体数の経時変化（1982年7月20日の調査結果）

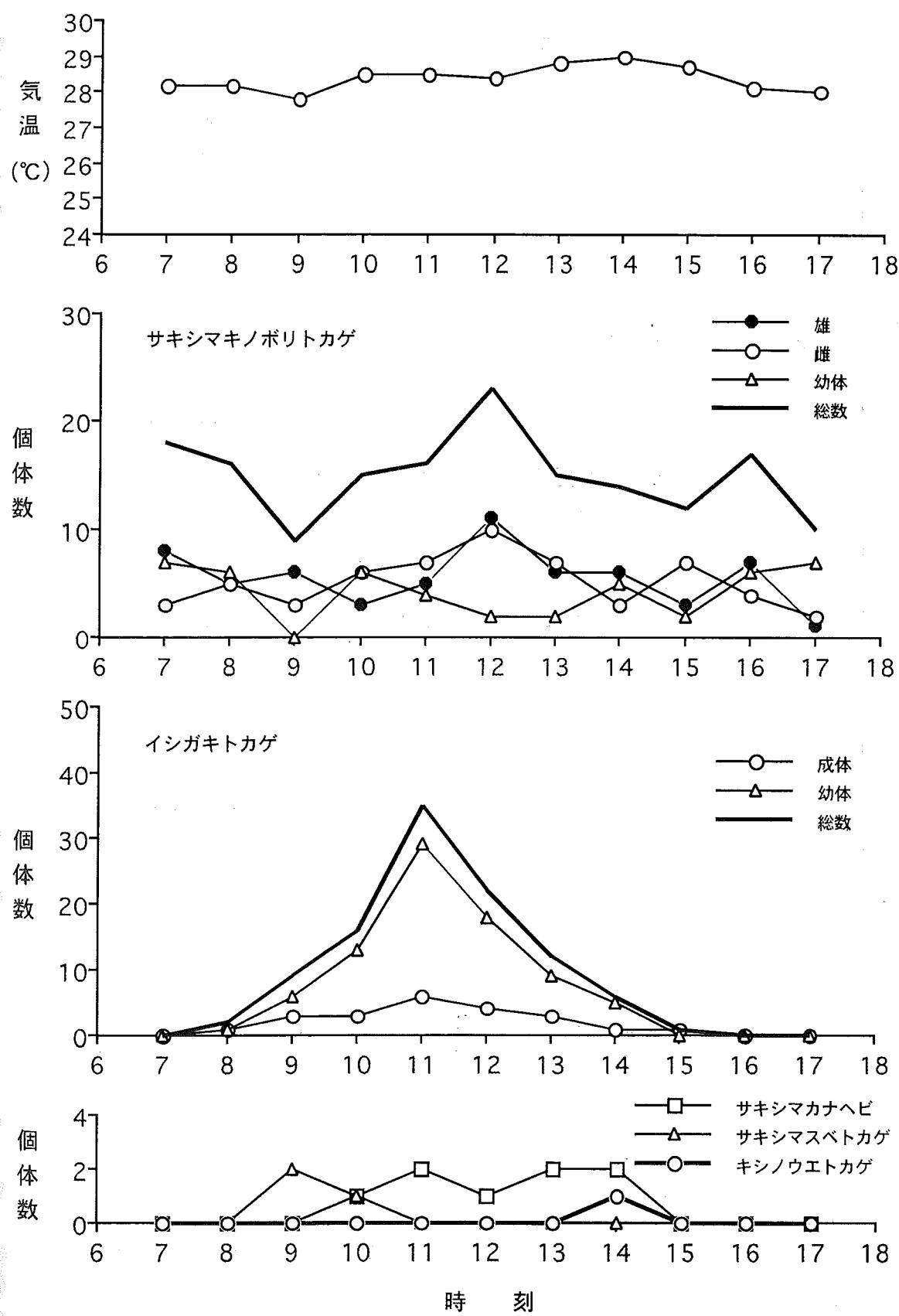


図2 西表島におけるトカゲ類の目撃個体数の経時変化（1982年7月25日の調査結果）

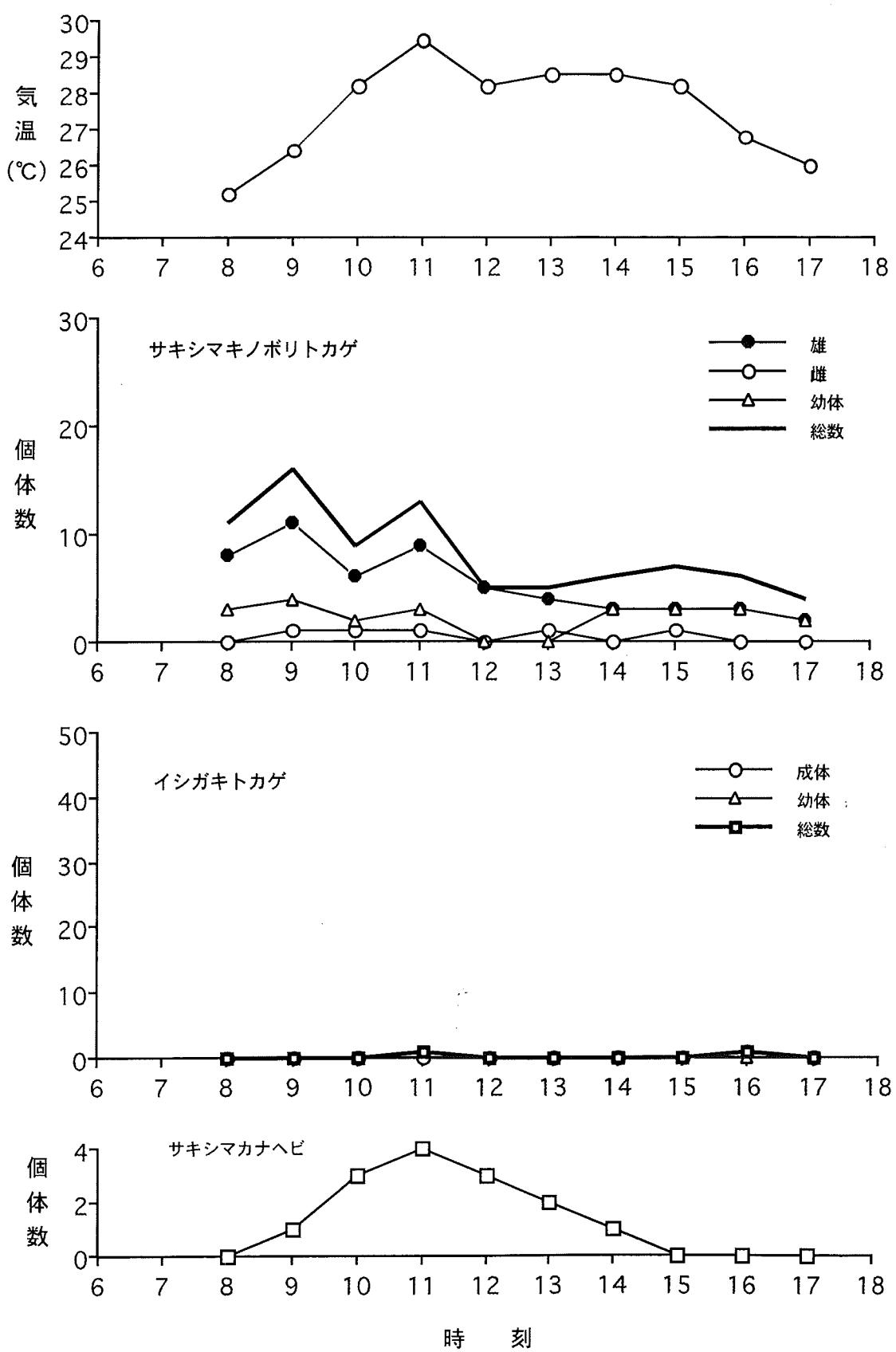


図3 西表島におけるトカゲ類の目撃個体数の経時変化（1982年10月12日の調査結果）

すぐに始点に戻った。1回のセンサス所要時間は目撃個体数により変化したが、16分から37分であった。センサスを始める際、気温・天気を記録し、その後、ゆっくり歩きながらトカゲ類を探した。目撃されたトカゲ類は、種別に成体・幼体を区別し、サキシマキノボリトカゲでは、さらに成体の雌雄を区別して記録した。キシノウエトカゲとイシガキトカゲの幼体はよく似ているため、本報で「イシガキトカゲ幼体」としたものの中に若干のキシノウエトカゲ幼体がふくまれている可能性がある。

結 果

7月および10月の調査結果を図1、2、3に示した。5種のトカゲのうち、定量的に活動パターンの傾向をつかめるだけのデータが得られたのはサキシマキノボリトカゲとイシガキトカゲの2種だけであった。

サキシマキノボリトカゲは7月では7時30分のセンサスから17時30分のセンサスまで、10月には8時のセンサスから17時のセンサスまで目撃された。総数でみても、性・発育段階別にみても、活動には特別なパターンは認められず、日中を通して活動していた。

イシガキトカゲは10月には11時のセンサスで幼体が1個体目撃されただけであった。一方、7月には、成体は8時30分から15時30分、幼体は8時30分から14時30分のセンサスで目撃された。幼体にくらべて個体群密度の低い成体ではその傾向は明瞭ではなかったが、幼体は正午頃をピークとする明らかな一山型のパターンを示した。

目撃個体数が少なかった3種のうち、サキシマカナヘビは7月には10時30分から14時30分のセンサスで、10月には9時から14時のセンサスで目撃された。7月および10月に目撃されたのべ個体数は、それぞれ8~10個体、14個体で、そのうち幼体のしめる割合は7月では20.0~62.5%、10月では92.9%であった。したがって、10月にのべ個体数が多かったのは、この時期に幼体の個体群密度が増加したためだろう。キシノウエトカゲとサキシマスペトカゲは、10月のセンサスではまったく目撃されなかった。前者は7月には13時30分から14時30分のセンサスだけでいずれも1個体だけ目撃された。後者は9時30分から16

時30分までのセンサスで目撃されたが、7月20日には13時30分と15時30分のセンサス、7月25日には11時30分以降のセンサスでは目撃されなかった。

真昼（7月は10時30分~14時30分、10月は10時~14時のセンサス）の目撃数を、その日ののべ目撃個体数の割合でみると、7月ではサキシマカナヘビ、キシノウエトカゲは100%、イシガキトカゲは88.3~90.4%、サキシマスペトカゲは33.3~57.1%、サキシマキノボリトカゲは50.3~53.4%であった。10月では比較的多くの個体が観察されたサキシマキノボリトカゲとサキシマカナヘビは、それぞれ46.3%、100%であった。この時間帯の気温は7月では28.2°C~29.5°C、10月では28.2°C~29.5°Cと、ほとんど差がなかった。

以上のことから、西表島山地林において昼行性トカゲ類は、活動時間帯により、日中を通して活動するサキシマキノボリトカゲ、サキシマスペトカゲと真昼に活動が集中するサキシマカナヘビ、イシガキトカゲ、キシノウエトカゲにおおまかに区分することができる。

考 察

調査方法の問題点

今回の調査では、既存の林道をゆっくり歩きながら目撃個体を記録するという方法をとったが、いくつか問題点を認めた。まれに樹幹に登ることがあるものの、活動の大半を地面で徘徊するトカゲ属の2種（イシガキトカゲ・キシノウエトカゲ）のうち、個体群密度の高いイシガキトカゲに対しては有効な方法であった。しかし、個体群密度が低い上、警戒心の強いキシノウエトカゲは、観察者が目視する以前にその接近を感じ、巣穴に逃げ込んでいる可能性が高く、幅の狭い林道を歩きながら目撃個体をカウントするという今回的方法では定量的なデータを得るのが難しいことがわかった。

一定区画内のはぼ全個体を標識した上で生息場所の細部までトカゲを探して得られた調査結果（Tanaka, 1986a；田中, 未発表）とほぼ同様の調査結果が得られているため、今回的方法は、イシガキトカゲとともに目撃数の多かったサキシマキノボリトカゲについても比較的有効な方法であると思われる。しかし、見通しのよい幹などをとまり場とす

るなわばかり所有雄にくらべて非なわばかり雄や雌、仔は隠蔽的であるため（田中, 1990, 個人観察）、歩きながらの目撃観察では、性・発育段階による相対的なデータには偏りが生じている可能性が高い。

サキシマカナヘビは、樹幹や枝だけでなく、サキシマキノボリトカゲがとまり場として利用しない樹木の葉上や草本上に加えて、地上でも採餌活動をおこなう。全身緑色である本種は、葉上にいる場合動かなければ見つけにくいため、見落とした個体が多くなったかもしれない。また、今回のセンサスでは、樹冠部まで確認できなかったが、林内に日が差し込まない早朝や夕方に樹冠部で活動しているという可能性は否定できない。

サキシマスペトカゲは体が小さく、樹幹で活動しているのが目撃されることもあるが（田中, 個人観察）、落葉のある地面で活動することが多い。落葉がほとんど堆積せず、乾燥気味の林道上では活動個体をみることが少なく、今回のような林道でのセンサスでは活動個体を目撃することは少ない。

以上をふまえると、目撃個体数の少なかった3種の活動について定量的なデータを得るためにには、今回とは異なる方法で調査する必要がある。

活動時間帯と体温特性

サキシマカナヘビ、キシノウエトカゲ、サキシマスペトカゲについては定量的なデータ収集の問題が残るもの、調査対象としたトカゲ類はおおよそ2つの活動タイプに分類できる。朝から日没近くまで、明るい時間帯を通して活動するサキシマキノボリトカゲ、サキシマスペトカゲと真昼に活動が集中するサキシマカナヘビ、イシガキトカゲ、キシノウエトカゲである。これらのトカゲ類の活動時間帯の違いは何に起因するのであろうか。

動物の活動に影響する外的・内的要因のうち、外温動物にとって温度生理や体温調節に影響する温度環境は特に大きな影響をおよぼすだろう。サキシマキノボリトカゲは広温性、つまり、幅広い範囲の体温で活動する温度順応者であり、今回の調査時期よりも気温の低い時期でさえバスキングはみられない（Tanaka, 1986a）。サキシマスペトカゲの体温特性についてはわかっていないが、日向で静止するなどのバスキングらしき行動はほとんどみられない。

太陽熱でなく、温度の異なる微細生息場所の選択を通して体温を調節している可能性がないとはいえないが、森林内の日陰では微細生息場所による温度差が大きいとは考えられないため、体温調節をおこなっているとは考えにくい。したがって、サキシマキノボリトカゲと同様に温度順応者であろう。

一方、サキシマカナヘビは頻繁にバスキングをおこない、体温を気温よりも高く維持する体温調節種である（Tanaka, 1986b）。イシガキトカゲとキシノウエトカゲについては体温特性についてはわかっていないが、バスキングを頻繁におこなう。サキシマカナヘビ同様、いずれの種も、おそらく体温上昇の効率を上げるため、バスキングの際、胸部を横に扁平にし、暖まった底質に触れる腹面の面積および直射日光に当たる背面の面積を大きくするという姿勢をとる（田中, 個人観察；写真4～6）。このことからも、これらの2種も体温調節をおこなっていることはまちがいない。

林道は、林内では比較的日向が多い場所である。しかし、当然ながら、日の当たり方は時刻により変化する。道の方角にもよるが、概して日が高い正午前後にもっとも日向が増え、朝や夕方には日が陰るが、島の東部に位置する調査地では夕方日が陰るのが早い。

広温性のサキシマキノボリトカゲやサキシマスペトカゲでは、バスキングを必要としないため、気温が一定以上であれば明け方から夕方まで一様に活動できる。一方、体温調節をおこなう3種は、日向が少ない時間帯にはバスキングにより体温を上昇させることが困難であるため、活動を休止する個体が増加するのかもしれない。

西表島において、イリオモテヤマネコ（阪口ら, 1990；当山, 1992）、カンムリワシ *Spilornis cheela perplexus*（原戸, 1987）などの鳥類やサキシマハブ *Trimeresurus elegans*、サキシママダラ *Dinodon rufozonatum walli*、サキシマバイカダ *Lycodon ruhstrati multifasciatus*などのヘビ類（新城, 1986；新城・三井, 1984；高橋, 1995；高良, 1963；田中, 2002；田中・干川, 1983）がトカゲ類を捕食することが知られており、サキシマヌマガエル *Rana* sp. もトカゲ類の幼体を捕食する可能性もある（田中, 1987）。このような天敵の多い環境のな

かでは捕食回避をより効果的におこなうことはきわめて重要である。体温調節をおこなう3種は徘徊しながら餌動物を探す広範囲探索型の捕食者で、天敵からの逃避も全力疾走による。トカゲ類では、スプリントスピードが体温に依存することが知られており(e.g., Hertz et al., 1982; Van Berkum et al., 1986)、ガラパゴス諸島のリクイグアナ*Conolophus pallidus*の幼体では、適切な体温を維持できるほど天敵であるガラパゴスノスリ*Buteo galapagoensis*からの捕食を回避できるという(Christian and Tracy, 1981)。また、採餌の成功率を高めるために、適切な体温の維持が重要であることがコモチカナヘビ*Lacerta vivipara*の実験で明らかにされている(Avery et al., 1982)。このように、体温調節をおこなう種では、採餌や捕食回避を効果的におこなうためには適切な高い体温の維持が肝要である。西表島山地林において、体温調節をおこなう3種の活動が真昼に集中していたのは、適切な体温を維持するためのコストが低いためであると解釈できる。

10月にはキシノウエトカゲはまったく目撃されず、イシガキトカゲものべ2個体しか目撃されなかった。一方、サキシマカナヘビの成体は少なかったものの、幼体の活動個体は比較的多かった。また、サキシマカナヘビの成体は真昼の時間帯だけを比較しても10月には活動個体が少なかった。この時間帯の気温は7月と10月で大差がなかったため、10月におけるこれらのトカゲ類の目撃個体の少なさは、低温により活動が抑制されたためとは考えにくい。

動物にとって、生きていく上で活動が不可欠であることは言うまでもない。しかし、温度条件が十分であっても、他の環境条件や個体の状況しだいで、活動を休止したほうがその後の生残を高めたり、活動した場合に無駄に消費されるエネルギーを将来の繁殖に振り向けることを通して、適応度を増大させることも考えられる。そのため、個々の種の活動の意味について明らかにするためには、対象とする個体群における個体成長や成熟年齢、成体や幼体の死亡スケジュール、繁殖投資のパターンなど、生活史のさまざまな側面、さらに、餌の利用可能性といった活動に関わる環境要因についても明らかにしなければならない。

文 献

- 新城安哲・三井興治.** 1984. ハブとサキシマハブの食性. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(VII) :59-65.
- 新城安哲.** 1986. サキシマハブの食性I. 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書(IX) : 91-96.
- Avery, R. A., J. D. Bedford and C. P. Newcombe.** 1982. The role of thermoregulation in lizard biology: Predatory efficiency in a temperate diurnal basker. *Behav. Ecol. Sociobiol.* 11:261-267.
- Christian, K. A. and C. R. Tracy.** 1981. The effect of the thermal environment on the ability of hatchling Galapagos land iguanas to avoid predation during dispersal. *Oecologia* 49:218-223.
- 原戸鉄二郎.** 1987. 西表島におけるカンムリワシの食性と巣立ち雛の行動. 沖縄島嶼研究 (5):49-58.
- Hertz, P. E., R. B. Huey and E. Nevo.** 1982. Flight versus flight: Body temperature influences defensive responses of lizards. *Anim. Behav.* 30:676-679.
- Ota, H.** 1990. The tree gecko, *Hemiphyllodactylus typus typus* (Lacertilia: Gekkonidae): an addition to the herpetofauna of Japan. *Jpn. J. Herpetol.* 13:87-90.
- Rose, B.** 1981. Factors affecting activity in *Sceloporus virgatus*. *Ecology* 62:706-716.
- 阪口法明・村田行・西平守孝.** 1990. イリオモテヤマネコの糞内容物からみた食性の地域変異. 沖縄島嶼研究 (8):1-13.
- 高橋健.** 1995. サキシマバイカダによるサキシマキノボリトカゲの捕食. *Akamata* (11):32.
- 高良鉄夫.** 1963. 琉球列島における陸棲蛇類の研究. 琉球大学農家政工学部学術報告 9:1-202.
- Tanaka, S.** 1986a. Thermal ecology of the forest-dwelling agamid lizard, *Japalura polygonata ishigakiensis*. *J. Herpetol.* 20:333-340.
- Tanaka, S.** 1986b. Preliminary observations on thermoregulation of the forest-dwelling lacertid lizard, *Apeltonotus dorsalis*. *Biol. Mag.*

- Okinawa 24:39-41.
- 田中聰. 1987. サキシマカナヘビを捕食しようとしたスマガエル. *Akamata* (4):5.
- 田中聰. 1990. 西表島におけるキノボリトカゲの社会構造. 爬虫両棲類学雑誌13:140. (講演要旨)
- 田中聰. 2002. サキシマハブ幼蛇によるイシガキトカゲの捕食：直接観察. *Akamata* (16):27-29.
- 田中聰・千川裕. 1983. サキシマハブ *Trimeresurus elegans* によるキシノウエトカゲ *Eumeces kishinouyei* の捕食. *Akamata* (1):4.
- Tanaka, S. and M. Nishihira. 1987. A field study of seasonal, daily and diel activity patterns of *Eublepharis kuroiwae kuroiwae*. *Herpetologica* 43:482-489.
- 当山昌直. 1985. 1. 琉球の両生類・爬虫類～現状と問題～. 南西諸島とその自然保護 そのII. 世界野生生物基金日本委員会科学委員会（編）, (財)世界野生生物基金日本委員会, PP.54-72.
- 当山昌直. 1992. 胃内容物から見たイリオモテヤマネコによるキシノウエトカゲの捕食行動に関する一考察. 沖縄島嶼研究(10):37-41.
- Van Berkum, F. H., R. B. Huey and B. A. Adams. 1986. Physiological consequences of thermoregulation in a tropical lizard (*Ameiva festiva*). *Physiol. Zool.* 59:464-472.
- Vitt, L. J. and G. R. Colli. 1994. Geographical ecology of a Neotropical lizard: *Ameiva ameiva* (Teiidae) in Brazil. *Can. J. Zool.* 72:1986-2008.



写真1 探索姿勢のサキシマキノボリトカゲの♂



写真2 活動中のサキシマキノボリトカゲの♀。

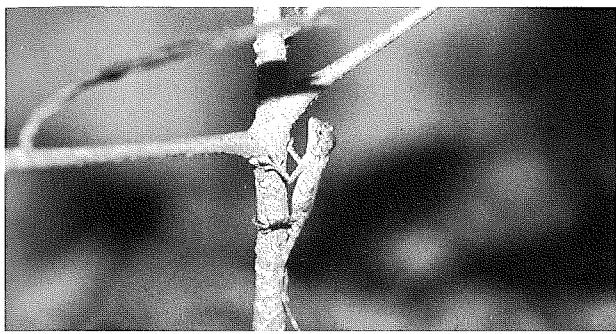


写真3 活動中のサキシマキノボリトカゲの幼体

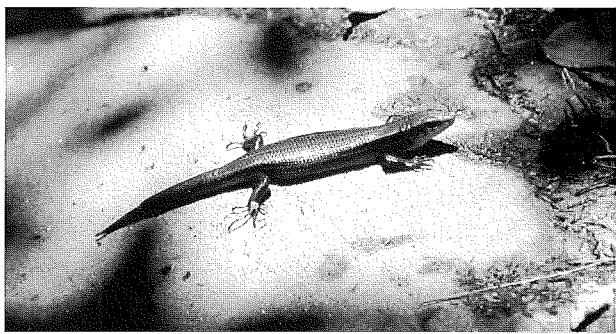


写真4 バスキング中のイシガキトカゲ



写真5 バスキング中のキシノウエトカゲ



写真6 バスキング中のサキシマカナヘビ



写真7 活動中のサキシマスペトカゲ



写真8 西表島古見山地林道ぞいのセンサスルート

資料紹介：殷元良の絵画資料

津波古 聰*

Material Note: In-genryou Work of Art in Okinawa Prefectural Museum

Satoshi TSUHAKO*

はじめに

琉球藩の絵師であった長嶺華国（1852～1932）は廃藩置県後に「琉球画人一覧」をつくり、それを末吉安久が時代背景を加え、沖縄タイムス紙上に「琉球画人伝」として発表した。華国の画人一覧は、明清時代の中国画風を中心としたもので、この一覧には、職業絵師いわゆる貝摺奉行所の絵師は除いたとした。鎌倉芳太郎は、この画人一覧に対して家譜中心で、口伝をそのまま加えた部分もあって調査の必要がある。さらに時代分類の統一性を欠いているため、史料的価値はかならずしも正確ではなく、総体的に画人一覧は、中国的理論の見方であって、琉球絵画史の正流から画人の選択をすべきとした。

琉球国は工芸品や各建造物等に参加しながらその全体像があまりはっきりしないのが絵師である。鎌倉氏が指摘したように「画人一覧」や「琉球歴代画家譜」及び口伝などすべて整理する必要性があるのはいうまでもない。

さて、そのまえに当博物館の絵画資料を少しづつ検証していきたい。そのなかで先の問題点なども含め「琉球絵画」を考えていければ幸いに思う。

今回は琉球の絵画史の中でも代表的な絵師・殷元良の作品を紹介したい。当博物館には「雪中雉子の図」・「花鳥図」・「竹の図」・「古柳水禽の図」以上4点の作品を収蔵しており、「古柳水禽の図」以外は、県の有形文化財に指定されている。

琉球国における絵師は、自了（城間清豊）から長嶺華国までの約200年間に57名の名前が確認された。57名のなかには教養のひとつとして手がけた者もあり、いわゆる絵師ではない者も含んでいる。そのな

かで公式な絵師（貝摺奉行所に所属した絵師）は20名少々であった。また、殷元良（座間味庸昌）、向元瑚（小橋川朝安）、毛長禧（佐渡山安健）らは貝摺奉行所には配属されてなく、王府直属の絵師の性格をもち、近習役や間切の惣地頭職などを務めている。彼らを加えても23名である。殷元良はそのなかでも特に優遇されていた絵師である。当時の國師・蔡温から「朝廷の一器」との意味をもつという「廷器」という字を賜っている。さらに国王より「中山首里」、「殷元良印」、「廷器氏」の三面の印を賜う。このことから殷元良に対する王府の待遇がかなりのものであったことが容易に想像できる。その後の王府は他の絵師に対して彼以上に待遇することはなかった。

琉球国の絵師は、中国や日本から画技を学び、発達していった。絵画制作の開始は遅く、17世紀の自了に始まり、李基昌（崎山喜俊）が薩摩藩の絵師に絵を学ぶことから技術導入が行われ、多くは中国に渡航し絵画の習得に努めている。この絵師留学も呉師慶（山口宗季）以降になり、呉着温（屋慶名政賀）が1773年自費で中国に渡ったのが最後となる。しかも絵の稽古のためであったが、具体的に誰それに師事したという記録はなく、結局絵の見本帳を購入しただけである。中国へは、殷元良、向元瑚らも渡航しているが、絵師として活動した記録はない。したがって、王府がおこなった絵師の中国派遣は、呉師慶で一応終わることになる。

最後の中国留学生となった呉師慶は、福州において孫億、順梁享、鄭大觀らのもと画技の勉学に励み、確実に福州の画風（写生体院体画）を修得し帰国し

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

た。しばらくして呉師慶は、王府の命により12歳の少年に絵の手ほどきをする。この少年が殷元良であり、王府の期待を一身に集めた絵師であった。王府が殷元良を貢摺奉行所以外の絵師にしたことは、琉球の絵画史において要的位置づけとして考えられ、もっと注目してもいい人物ではなかろうか。

殷元良の略歴

さて、殷元良は1718年12月21日に仲松里之主親雲上庸象と眞満夫婦の次男として生まれる。6、7才のころより絵を描き始めていくが、父庸象は、絵より字を習うように叱りつけたが、それでも習字の合間に密かに絵を描き続けた。7、8才ころその絵の評判は各地方まで届くようになったという。1729年（雍正7）、王府は呉師慶に殷元良の絵の教師としての役目を与える。殷元良は、王府の期待にようやく勉学に励んだのであろう。ついには国師・蔡温より、「廷器」の字を賜い、尚敬王より印三面を賜うようになった。1733年（雍正11）絵画の修練の業績に対して若里主の位を叙され、元服を迎える。1737年（乾隆2）向氏松村親雲上朝英の娘思戸と結婚、その後三男二女を授かる。殷元良は儀式のたびに聞得大君や王妃から御玉貫等を賜っている。まさに「朝廷の器」にふさわしい待遇である。1752年（乾隆17）に大筆者として中国へ進貢する。1754年（乾隆19）10月、円覚寺に奉納する尚敬王御後絵の製作にはいり、11月に完成する。1767年（乾隆32）に死去、享年50才。このときも国王より御香5本、御玉貫一雙等、また毛氏聞得大君加那志、馬氏佐敷按司加那志らから米などが下賜された。以上、殷元良の簡単な略歴である。

彼の記録は、比嘉朝健が著した「琉球歴代画家譜・上」（『美術研究』、1936）にくわしい。家譜を見ると作品制作の記録は、元服後に記録される内間御殿にあった石碑の鳳凰の図柄を手がけ、その後尚敬王の御後絵を製作するが、この2件のみである。殷元良の略歴のなかで、1752年の中国への渡航は、特に注目したいところであるが絵師としての動きはみえない。しかし大陸から何らかの影響を受けたことは容易に想像できるであろう。1752年以降の現存する作品は3点（山水図2点、竹の図1点）あるが、これら作品からの検討が必要と思われるが、作品数

が少ないので、次の機会に検証したい。

なお、戦前鎌倉芳太郎が調査し、写真に撮った尚敬王の御後絵は、1796年に向元瑚が模写したものである。

殷元良の作品

殷元良の作品は、落款印章があきらかな作品を、刊行されている図録等から抜き出した。実物がなくとも写真等で記録されたものも含め、リストにあげた。それが別表の20点の作品である。その他に殷元良の作品を模写したとされるもの1点、殷元良の作品として伝えられるものが2点であった。20点のうち6点は実物がなく、写真のみの作品である。写真2点は鎌倉芳太郎が戦前調査したもので、『沖縄文化の遺宝』掲載されている。残りの4点は未公開の写真で、当博物館に収蔵されている。（後日、鎌倉芳太郎氏撮影で、沖縄県立芸術大学にも所蔵されていることがわかった）

殷元良の作品を模写した作品「琉球国図」は、名古屋の西尾市立図書館岩瀬文庫蔵で、那覇港と首里城を俯瞰的に描いたものである。類似の資料として「首里那覇港図」あるいは「琉球国貿易図」と称される屏風の構図に近い。ちなみに最近、同種の屏風絵に関する文章等が散見され、研究が進められているようである。

伝殷元良の作品は、「神猫の図」である。もともと首里城に収蔵されていたが、尚順氏が爵位を授かった際の祝儀として尚泰侯より贈られたものである。残念ながら絵は現存せず写真のみの資料である。この絵を実見し、写真撮影を行った鎌倉氏は、三省堂の図と類似点は見いだせるが、誰の筆か不明なりとし、後日三省堂にて殷元良の猫図を見ている。確かに殷元良は、猫をテーマとした作品を描いているが、尚順氏蔵の「神猫の図」ではないようである。類似品として呉師慶作の「神猫の図」（那覇市所蔵）が現存している。伝殷元良の「神猫の図」は、画面の左下に印影が二つほど確認できるが、解説不明である。また署名などなく、作者を特定すべき材料は画面から得ることはできない。それでも伝殷元良としたのは、首里城に収蔵されていたころから殷元良作として伝わっていること、過去の琉球の絵画関係論文等において、作品のできと琉球歴代画家を比較し

たところ殷元良以外に描けることができる絵師はないとの見識であった。したがって、殷元良作とする材料はあやふやなので、「神猫の図」はリストより省いてある。

画題は山水・6点、花鳥図等・4点、人物等・4点、鶴・3点、竹や梅等静物・3点である。山水の6点は夏秋冬の季節をテーマにした作品と思われる。人物等のうち2点は「普化来迎図」で修行僧が鈴を手に天上より降りてくる姿を描いたものである。戦前比嘉景常が著した『久米島紀行』に紹介されている。

昭和12年、美術教師・比嘉景常は、一中入試の監督のため久米島に渡るが、このときの久米島の印象を『久米島紀行』にまとめ同年の琉球新報紙上に連載した。比嘉は試験の終わった2月13日に上江洲知元氏の親類にあたる屋号内間前宅（与世盛家）において「普化来迎図」を知る。その後、絵はハワイに渡り、一時当博物館に寄託されていたが、現在個人が所蔵している。

一方類似の作品は写真が残されていて、月□（湛か？）叟の贊が見える。久米島にあったものは贊がなく、筆致も若干異なるが、ほぼ同じ構図である。このモノクロ写真は那覇久茂地町在の佐久川兼栄蔵（縦84.7×横38.3）の作品を撮したものと思われる。写真は当博物館にあり、写真の状態からみて師範学校の郷土資料室にあったものと推測され、鎌倉芳太郎が撮影したものと思われる。同名の作品が過去に2点あったことになり、殷元良の人物図を研究するうえで参考になる資料であろう。なお、本作品が与世盛家にあった経緯は記録がなく不明である。

琉球の絵画がどのくらい現存しているのか定かではないが、絵師の人数と比較すると、多いとは言えない。殷元良の作品20点も決して多いとは言えないが、沖縄戦のことを思うと琉球王国を代表する絵師の作品がこれだけ現存することは幸いといえる。以下、当博物館に収蔵されている4点について紹介する。

1) 紙本着色「雪中雉子の図」 一幅

縦143.7cm×横67.2cm

画面構成は、雪を被る木と岩で画面を斜めに分け、岩につがいの雉子を描く。その下に朱色の牡丹を配

置し、絵の中心となるつがいの雉子を飾りたてる。雪の描写は、周辺の空間を塗りつぶすことによって白抜きで表しており、紙の地色を利用している。別名「雪景花鳥図」とも呼ばれている。他の作品と比べると技巧的すぎるとの意見もあるが、もともと模写であるため、原本を忠実に写しとった結果である。中国の院体画の影響が強いように思えるが、この画風はたして殷元良本来のものかどうか疑問である。戦前は屋慶名政方家蔵のもので、戦後、当博物館が遺族より入手している。

この作品のもと絵は中国の絵師・章聲作「雪中花鳥図」（縦5尺8寸7分横3尺1寸6分）という。戦前は尚侯爵家が収蔵していたが、現在は不明。殷元良の作品と比べ、陰影等の細部が異なる程度で、つがいの雉子、老木、牡丹、草の配置、彩色等はほぼ同じである。章聲（生没年不詳、18世紀）は、字・子鶴、浙江仁和出身で、父章谷の画法を受け継ぎ、山水花卉にすぐれた絵師といわれている。

2) 絹本着色「花鳥図」 1幅

縦98.7cm×横42.7cm

画面構成は、笹や牡丹とともに梅の枝が画面の上下にのびるように描かれ、笹の一枝に鳥が一羽止まっている。梅の枝の描写は鋭く、空間を切りとるようにならわせている。画面の斜めの方向に枝を置き、画面中央付近に鳥を配置している。

構図は、可もなく不可もなく、バランスがとれている作品である。鳥や梅等の描写は細かく、その技術に感嘆するが、逆に動きが押さえ込まれているようと思える。

この作品を模写した絵師がいる。貝摺奉行所に所属していた呉着温（1737～1800、後に呉着仁に改名）である。呉着温の「花鳥図」（個人蔵）は、左右逆に描写したもので、木立や鳥、花など忠実に模写している。（『未公開作品による琉球王朝の書画』平成4年、古美觀宝堂を参照）呉着温は貝摺奉行所に勤めていたころ殷元良に師事しているので、師である殷元良の作品を模写したのであろう。

3) 紙本墨画「竹の図」 1幅

縦101.7cm×横45.4cm

制作年：1762年（乾隆27）

大湖石と竹を描いたものであるが、奥にみえる竹の墨は手前より少し薄く、奥行きを出し、静かな情景を描いたものである。竹の根元に見える岩は竹の鋭さとは逆に柔らかな墨で描き、その対比をねらっている。画面の上半分を占めている竹の葉は、中央から蛇行しながら上に配置し、最後は空間を囲うかのように下に垂れさがっている。殷元良晩年の作である。本作品は沖縄の歴史家・東恩納寛惇氏より寄贈されたものである。

4) 絹本着色「古柳水禽図」 1幅

縦100.0×横47.8

画面の構成は、右手より枝がのび、その先に牡丹の花が咲く。牡丹の花は画面ほぼ中央に位置する。牡丹と右下角への線上に鳥一羽が水面をのぞく。

鳥は小さくても牡丹が誇いとなって自然と目にはいる。鳥は水中の藻がゆらめく様子をのぞく。画面のところどころに見所を置きながら、上部の柳で空間を閉じこめる構成は、無難である。「花鳥図」と本作品を比べると鳥や木、花等の描写は、共通な部分が多く見られ、お手本的な書き方である。水中の藻などは技巧的に感じられる。

以上、4点の作品を簡単に紹介したが、「竹の図」以外の3作品は、花鳥を題材にしたもので、鳥、花、木、岩を組み合わせた作品である。画面の大きさは「雪中雉子の図」が大きく、その他の作品は、ほぼ同じ寸法である。画面構成を見てみると絵の中心となる材料を画面中央より下あたりに描く。そこを中心に対角線上に各材料を配置して、バランスをとっている。ただ、正直に線上にあるため、被写体の動きを止めてしまう描写になっている。筆は「雪中雉子の図」の木が柔らかく緩やかな筆使いに対して「花鳥図」、「古柳水禽図」の木は堅めの勢いのある線で描いている。「雪中雉子の図」は雪を表現するため柔らかく緩やかな筆使いであるが、「花鳥図」と「古柳水禽図」に見られる木は完全に同じ描写である。殷元良の筆使いは、墨を多めに含ませ、勢いよく走らせる。墨色を変えてもその動きは同じである。竹の図に見られるような岩のたっぷりとした墨使いは、他の作品には見られない。また、岩は輪郭と岩肌の一部を少し斜めに走らせるが、岩全面にわたり描写することはない。上から下へ走る岩肌の

表現は呉着温の作品にも見られる。墨の上に青の色を配置する点苔も殷元良や呉着温の作品によく見られるものである。花や木の表現に対し、鳥は雉子であろうが、ウグイスであろうがその目は鋭い。ピッと張った尾ときれいに胴部にまとめた羽の美しさ、これが獲物をねらうかのような目によって緊張感をだしている。鳥の描写は、呉着温であろうと模写できず、殷元良ほどの鋭さはない。

おわりに

琉球の絵画の変遷を①1600年代の絵画技術の導入、②琉球の絵画の創設期、③文人画や風俗画など画風の多様化へと大きく三つに分けられると思う。そのなかで王府は殷元良を優遇し、貝摺奉行所の絵師と区別し、別扱いにした。その真意は不明であるが、小さいながらもアカデミックな体制を作ろうとしたのではないかと推測される。

今回、当博物館収蔵の絵画資料を紹介し、研究材料に利用できないかという目的で記述したが、久しぶりに殷元良の作品を眺めているとき、ふと思った疑問点と収集していた殷元良の資料等を紹介しながら、この拙文を思いつくまま記してみた。

参考文献

- 比嘉朝健「琉球歴代画家譜 下」（『美術研究第48号』昭和10年）
鎌倉芳太郎「第1章首里王府画人伝及び貝摺奉行所絵師系譜一首里王府画人」（『沖縄文化の遺宝』岩波書店、昭和57年）
林 進「第四章 琉球絵画研究 宗季『花鳥図』－近世写生画の魁」「附論琉球宮廷絵師 座間味庸昌」（『日本絵画の图像学的研究』、八木書店、平成12）
比嘉朝健「清朝御物尚侯爵家の章聲筆雪中花鳥圖に就いて」（『塔影』塔影社、昭和12）
『未公開作品による琉球王朝の書画』（編集発行・古美術観宝堂、平成4年）

殷元良作品一覧

	作品名	数量	制作年	形態	法量	署名	印章	所蔵先
1	花鳥図	一幅	18c	絹本着色掛幅表	98.7×43.7	中山首里殷元良	殷元良印(朱文)、廷器氏(白文)	沖縄県立博物館
2	竹の図	一幅	1763年	紙本墨画掛幅表	101.7×45.5	壬午孟夏中山殷元良	殷元良印(朱文)、廷器氏(白文)	沖縄県立博物館
3	雪中雉子の図	一幅	18c	絹本着色掛幅表	143.7×67.2	中山首里殷元良	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)	沖縄県立博物館
4	枯柳水禽之図	一幅	18c	絹本着色掛幅表	100.0×47.6	中山首里殷元良	殷元良印(朱文)、廷器氏(白文)	沖縄県立博物館
5	船上武人図	一幅	18c	紙本着色掛幅表	96.7×41.5	球陽殷元良	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	大和文華館
6	寿老人	一幅	18c	紙本着色掛幅表	111.0×47.3	中山首里殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	個人蔵
7	山水図	一幅	1754年	絹本着色掛幅表	104.0×39.9	甲戌仲春球陽殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	個人蔵
8	山水図	一幅	1748年	紙本着色掛幅表	84.6×43.7	戊辰仲夏球陽殷元良	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)	ドイツ・バーデン＝ヴュルテンベルク州国立民族学博物館
9	山水図	一幅	18c	紙本着色掛幅表	126.4×58.0	中山殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	東京国立博物館
10	鶴図	一幅	1748年	紙本着色掛幅表	86.0×40.4	乾隆十三年歲在戊辰立春之前球陽首里殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	大倉集古館
11	山水図	一幅	1753年	紙本着色掛幅表	94.9×43.4	乾隆拾捌年癸酉孟夏球陽首里殷元良寫	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	正木美術館
12	白梅牡丹図(仮称)	一幅	18c	絹本着色掛幅表		球陽首里殷元良	三顆	個人蔵
13	雪景山水図	一幅	18c	紙本着色掛幅表	110.0×48.6	殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	個人蔵
14	普化来迎図	一幅	18c	紙本着色掛幅表	89.0×38.4	琉球中山首里殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	個人蔵
15	普化禪図	一枚		モノクロ写真(掛幅表)		殷元良	中山首里(朱文)、殷元良印(白文)	(佐久川兼栄旧蔵)
16	花鳥図	一枚		モノクロ写真(掛幅表)		做(闕)之□殷元良		
17	栗鶴図	一枚		モノクロ写真(掛幅表)			(印章のみ)	(豊見城朝熙旧蔵)
18	栗鶴図	一枚		モノクロ写真(掛幅表)		中山首里殷元良	中山首里(白文)、殷元良印(朱文)、廷器氏(白文)	
19	夏景山水図	一枚	1750年	モノクロ写真(掛幅表)		庚午秋球陽首里殷元良寫	朱印三顆	(尚順男爵旧蔵)
20	白梅図	一枚		モノクロ写真(掛幅表)		殷元良	殷元良印(白文)、廷器氏(朱文)	

凡例：1、殷元良の作品は、各所蔵先の図録等から取扱したものである。

2、個人の作品については、諸般の事情により個人蔵とした。

3、モノクロ写真(No15～20)は、すべて当博物館蔵である。

4、モノクロ写真是、その後の調査で沖縄県立芸術大学蔵の鎌倉芳太郎資料に含まれていたことが確認された。

5、所蔵先の()は、戦前の所有者。

6、モノクロ写真的作品は、現在のところ消息不明。



1) 「雪中雉子の図」



3) 「竹の図」



2) 「花鳥図」



4) 「古柳水禽図」

研究ノート：尾崎清次と『琉球玩具図譜』について

久 場 政 彦*

The Work of Seiji Ozaki and His Book "Ryukyu Printed Folk Toy's Books"

Masahiko KUBA*

はじめに

尾崎清次（1893～1979）は、神戸市の医師・版画家で、郷土玩具の木版画集『玩具図譜』全5巻の作者として著名である。本稿でとりあげる『琉球玩具図譜』は、『玩具図譜』全5巻の終巻にあたり、尾崎自身が1932年（昭和7）に沖縄を訪れて収集した郷土玩具を基に製作・発行したものである。1936年（昭和12）発行の初版は、55枚の版画を見開きの台紙に1枚ずつ貼付した分冊形式で収めており、右頁にはその解説文が添付されている。この解説文は、「琉球列島の玩具と之に関係した育児上の習俗、信仰、行事等を採録」（序文）した詳細な内容で、昭和初期の沖縄の郷土玩具についてうかがい知ることが出来る数少ない資料である（表1）。

なお、『琉球玩具図譜』の基となった収集品の琉球玩具（張り子、土製品、練り物、木製品）は、日本玩具博物館（井上重義館長）^(注1)が所蔵する尾崎コレクション（尾崎が生前に収集した全国各地の郷土玩具の総称）と、関西沖縄文庫^(注2)の収蔵資料の中に含まれている。これらは、昭和初期に製作された琉球玩具で現存する数少ない貴重な資料である。

昨夏と今春、兵庫・大阪を訪れる機会があり、日本玩具博物館及び関西沖縄文庫において、両館が所蔵する尾崎コレクションの閲覧と関係資料の収集を行うことができた。管見では、尾崎清次と『琉球玩具図譜』について論じた文献・論文は皆無に等しく、関係資料も僅かである。そうした状況の中で、尾崎に関する一定の調査及び資料収集の成果が得られたことは幸運であった。

本稿は、その成果の報告と若干の考察である。

沖縄の郷土玩具

沖縄では郷土玩具を「イーリムン^(注3)」と称し、次の2種類に大別される。1つは、玩具市で大人が子どもに縁起物として買い与える商品玩具で、ハイヌジ（張抜、張り子のこと）等が含まれている。もう1つは、周りにある自然物（木の実、貝殻、木の葉、藁等）を素材とする手作り玩具で、ティンチャマ（手茶目）と呼ばれていた^(注4)。両者のうち、前者を総称して「琉球玩具」という場合が多い。

琉球玩具は、素材の別により、紙や土（焼物）、木（練物を含む）、紙と竹、紙と木、糸と布等に分類できる。中国・日本・東南アジア各地の影響が見られ、日本本土とは異なる独自の題材や彩色が用いられており、全国の郷土玩具愛好家の間でも人気が高い。

かつて、沖縄の郷土玩具の中でも、張り子等の琉球玩具は高価なせいたく品で、庶民が購入することは難しかった。専門の玩具店もなく、1年のうちユッカヌヒー（旧暦5月4日）前後の数日間だけ開設される玩具市で購入するのが通例であった。

ユッカヌヒーになると、那覇市久米の大門前通り（孔子廟前から旧那覇市役所前までの区間）や首里城門前の綾門大道（中山門～守礼門区間）の両側には戸板を仮の台とし、町傘や白布で天幕を張った露店が立ち並び、賑やかな玩具市（イーリムンマチ）を形成した。露店の売り手は女性が多かったが、おそらく玩具製造者の妻や娘たちであったと思われる。

年に1度の販売では生計が成り立たないことは言うまでもない。琉球玩具の製作・販売は専業ではなく、木挽師や陶工といった職人たちの副業として営まれていたのである。

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

尾崎が1932年（昭和7）に調査のため沖縄を訪れたときは、玩具市の露台の上にはブリキ製やセルロイド製の玩具が並び、琉球玩具は片隅に追いやられていた。それでも、尾崎の来訪を待ちかねていたかのように、玩具の製造は細々と続けられていたのである。尾崎は沖縄に滞在中、職人たちを訪ね歩き、膨大な数の琉球玩具と関係資料を収集することができた。その成果が後年、『琉球玩具図譜』として結実することになる。

尾崎清次と郷土玩具

尾崎の生涯については年譜（表2）を参照されたい。ここでは、尾崎と郷土玩具との関わりを中心にして述べることにする。

尾崎清次は、1892年（明治26）2月6日、愛知県西尾市の旧家に長男として生まれた。幼い頃から絵を描くのが好きで将来は画家を志望していたが、家業が医院であったため、医者の道を選択することになった。

1917年（大正6）、京都の医大を卒業後、京都帝大医学部小児科教室に勤務。この時、『玩具図譜』出版の機会を提供する笠原道夫博士と出会う。1921年（大正10）、神戸市技師として神戸市立児童相談所に転勤。さらに翌22年、29歳で関久子（尾崎邦）と結婚する。

同年、二人は和歌山に旅行し、路傍の祠に供えられたおもちゃと遭遇する。郷土玩具との運命的な出会いである。関は次のように述懐している。

「そもそもは神棚に供えてあったおもちゃを、あんなん珍しいわね、と言ったんがはじまりでね。それに尾崎が小児科の医者やったから、医者の立場から、なんで子どものおもちゃと神が結びつくのか、子どもの発達との関係はどうなのか、文化史的な風俗とか習慣とか、医学と結びつくところがあるもんね。」^(注5)。

関の証言によると、尾崎が小児科医の立場から、郷土玩具を含む児童文化全般に興味を抱いていたことが判る。とは言え、尾崎が郷土玩具のもつ素朴なかたちと美の有り様に心を揺さぶられたことも事実であり、関も別の箇所でこう証言している。「和歌山の郊外、田甫の中の誰がまいるともないひっそりとしたお宮の、そのまた傍の小さな祠の中に、赤い

桃を抱いた瓦の猿の群を見付けた時のその感激、六十年を経た今でさえ胸をゆすぶられる思いがします」^(注6)。

ここで吐露された心情は、決して関1人のものではない。後年、郷土玩具の共同研究者として同じ道を共に歩む、まさに最初の一歩がこの瞬間から始まったことをうかがわせる描写である。

この感動的な出会いから間もなく、尾崎は京阪在住の同好者と共に「婢子会」という郷土玩具の研究会を結成する。関西で最初の郷土玩具の研究会であった同会には、尾崎の他に友野祐三郎、筒井英雄、黒田源次、西原豊が参加していた。会の活動は、1924年（大正13）11月から1926年（大正15）8月まで続き、この間『日本土俗玩具集』5編を発行している。

この時期、尾崎は大阪市南の道頓堀南詰にあった郷土玩具店「筒井」の店主で同人の筒井英雄から全国の有名玩具を購入する一方、自ら地元周辺の郷土玩具を収集して歩いた。また、後年の『玩具図譜』につながる「玩具図鑑」（玩具を題材とした木版画集）の製作もこの頃から始めている。

なお、『琉球玩具図譜』初版の凡例には、「今は亡き筒井英雄氏が琉球玩具蒐集に払われた努力も忘れ難い」とあり、尾崎が同人の筒井を介して当時すでに琉球玩具に接していた可能性を示唆している。

1929年（昭和4）1月、笠原小児保健研究所の開設に伴い研究員として勤務。その開所記念として『育児上の縁起に関する玩具図譜』第1巻を出版、翌30年に第2巻、翌31年に第3巻と立て続けに出版している。さらに、29年に朝鮮へ、32年には沖縄へ旅行し、その成果をまとめて34年『朝鮮玩具図譜』、36年『琉球玩具図譜』を上梓した。

1934年（昭和9）、神戸市長田区に小児科医院を開業。38年、16年間連れ添った妻の関と別居する。

戦になると、日中友好協会、日朝協会、日ソ協会の会員となり、京阪神で現代中国美術展の開催に尽力している。1960年（昭和35）から約10年間、自宅に保育所を開園。43年、元看護婦の近藤文恵を養女に迎えている。その文恵の証言によれば、尾崎が郷土玩具を収集していたのは昭和初期までのことで、戦後は収集する様子はなかったという^(注7)。

1969年（昭和44）、眼底出血のため半失明状態となり、病床に伏す日々を経て、1979年（昭和54）7

月18日逝去した。享年87歳。

沖縄調査旅行

尾崎は、『琉球玩具図譜』発行に先立つ1932年（昭和7）、沖縄に約10日間の調査旅行に出かけている。尾崎が調査旅行を行った昭和7年頃の沖縄はどの様な状況だったか。尾崎自身による記録がなく、他の文献資料で類推するしかない。

沖縄では、大正の中頃からブリキ製が、昭和期に入るとセルロイド製の玩具が大量に出回るようになり、琉球玩具は急速に衰退する。尾崎の調査旅行から5年後（昭和12年）の玩具市の様子を伝える新聞記事が残されている。それによると、この頃すでにブリキ製の玩具も廃れ、露台の上にはセルロイド製品が氾濫する有様で、琉球玩具にいたっては露台の片隅でわずか2・3個を見かけるだけであったと伝えている^(注8)。

尾崎の記述にも、沖縄で張り子玩具が盛んに製作されていたのは「今より約30年前迄（明治30年代・筆者注）」とあり、その頃は島袋、輿儀、翁長、岸本、仲里、小橋川、友寄等の諸家が玩具製作に従事していたが、尾崎が来県した時には友寄の一家を残すのみであったと述べている^(注9)。

こうした状況下で、尾崎は膨大な数の琉球玩具と関連情報を収集している^(注10)。収集の合間には、那覇市内の劇場で「王師來朝」を観劇し、“笠を被つて杖を持った男が舞台で踊る姿”を観て、張り子人形にも同形のものがあると感嘆している。

ところで、尾崎が沖縄の旅で収集した玩具の姿と情報の大半は『琉球玩具図譜』に採録されているが、これ以外にも原資料が存在するのではないかという疑問が残る。もし、文字記録や写真等の映像資料が保管されていれば、昭和初期の琉球玩具を取り巻く状況についてうかがい知ることが出来る貴重な資料となる。残念ながら、今回の調査ではこれらの未明資料に関する情報は得られなかった^(注11)。今後の本格的な調査・研究を待たねばならない。

『琉球玩具図譜』発行までの経緯

尾崎は『玩具図譜』第1巻発行と同じ年の夏、朝鮮旅行を行っている。この旅行が後年の『朝鮮玩具図譜』につながる調査旅行であったことは明白であ

る。それにしても、尾崎が朝鮮と同じく、沖縄という言わば当時の日本領土の“辺境”にあたる地域を選んだのはどういう理由からか。版元の笠原は序文の中で「近時南島研究が盛大となり從て此地の風俗慣習言語等の調査報告も數多く（中略）然るに琉球の玩具並に之に関する習俗信仰等を総合的に記載したものに至つては其数甚だ寥々たるものである」と述べており、当時の南島研究の隆盛が琉球（沖縄）に着目した一要因であることを示唆している。

さて、玩具図譜の製作にあたっては、妻の関久子が深く関わっていた。解説文の執筆に必要な参考文献の研究や資料の作成を担当したのは久子であった。玩具図譜に付された引用文献みると、その数の多さに加えて、他分野に亘って涉獵された内容の豊富さに驚嘆させられる。

久子の仕事ぶりは生活面でも大いに發揮された。夫からもう生活費60円の中から作業場として借りた一間の家賃を払い、そこに「現代木版画の会」同人の摺り師を招いて住まわせていた。さらに、摺り師の食事など身の回りの世話や色刷りの手伝いにまで及んだ。

こうして『琉球玩具図譜』は完成し、100部が刷り上がって関係者に配布された。しかし、大阪空襲で笠原小児研究所が焼け、版本と一緒に配布先リストも焼失したため、その大半は所在がわからなくなってしまった（後年、2部の初版本が県立博物館に、1部が関西沖縄文庫に寄贈された）。

琉球資料の行方

尾崎が生前に収集した膨大な郷土玩具は、現在尾崎コレクションとして日本玩具博物館に収蔵されている。ところが、沖縄での収集品を含む琉球玩具のコレクションは、因縁があって関西沖縄文庫と二分されることになった。この経緯について簡単に触れておきたい。

尾崎が収集した琉球玩具は当初、大阪市大正区にある関西沖縄文庫（主宰・金城馨）に寄贈された。その経緯について触れた新聞記事がある^(注12)。

それによると、戦渦で所在が判らなかつた『琉球玩具図譜』の初版が神戸市で発見され、その所有者である女性が関久子への譲渡を申し出たが、関自身は関西沖縄文庫への寄贈を希望しているという内容

である。結局、このとき図譜と一緒に琉球玩具のコレクションも寄贈されたのであろう。

一方、日本玩具博物館にも尾崎の琉球玩具コレクション（張り子、木製品、土物、練り物）が65点ほど収蔵されているが、その経緯については館長の井上自身の記述に詳しい^(注13)。

井上が尾崎を知ったのは1978年（昭和53）のことである。しかも、このときは尾崎を郷土玩具の収集家として紹介されただけで、『玩具図譜』の著者であることは知らなかった。知人の紹介で尾崎宅を訪問したとき尾崎は病床の身で、収集品のことは話題に上らなかったという。

没後、文恵から『玩具図譜』を譲り受け、初めて尾崎の偉大さに気づかされることになる。後日、文恵の転居にともない、残されていた郷土玩具と書籍を引き取ることになるが、沖縄で収集した琉球玩具はその中に含まれていなかった。

後年、井上は関西沖縄文庫に出向き、双方で協議した結果、尾崎の琉球玩具は一部を除いて文庫側から日本玩具博物館へと移管されることになり、这一件も決着をみることとなった。

『琉球玩具図譜』に見る課題

最後に、『琉球玩具図譜』から読み取れる問題点について触れておきたい。

先ず、最初に明治～昭和初期における琉球玩具の製作地について述べる。

伊波〔1930〕の記述によると、琉球玩具の製作地として、那覇市内の若狭町、湧田の崎、壺屋の3地区が挙げられている。若狭町は古くから諸工業の発達した町で、櫛や塗物（漆器）等の製作が盛んであった。これらに従事する職人たちが副業として郷土玩具を製作したことは先述のとおりである。昭和初期の状況を知る古老の大半が若狭町を琉球玩具の生産地として挙げており、当時から玩具製作の中心地として有名であった。とりわけ、爬竜船や山原船・唐船などの木製玩具は、若狭町の挽物師が一手に引き受けているといふ。

湧田の崎は、ハイヌジ（張り子）の生産地であったが、その種類は人形などに限定されていた。

以上の点を見る限り、琉球玩具の製作は湧田の崎よりも若狭町の方が盛んであったと判断されるが、

昭和初期に発表された文献や論文等が琉球玩具製作の中心地として指摘するのは湧田の崎の方である。玩具図譜の解説でも、明治から昭和初期にかけて琉球玩具製作に従事していた友寄という一族のことがたびたび登場するが、彼等の居住地は湧田の崎である。湧田は、古くは那覇市の四町（西町、東町、若狭町、泉崎町）の1つで、現在の那覇市泉崎1丁目の辺りにあった。1682年に壺屋町に窯業が統合されるまでの65年間、湧田焼の生産地として知られており、その後も明治期から大正・昭和初期に至るまで沖縄県庁や県立図書館などが建ち並ぶ那覇市の中心地であった。

湧田の崎に関する資料は限られており、不明な点が多い。かつて湧田の崎にはサバツクヤー（草履作り職人）が多く居住していたので、周辺住民はこの付近を“湧田サバカチ（草履編み）”と呼んでいたという記録もある^(注14)。これらの職人たちが、副業として年に一度、琉球玩具を製作していたことは想像に難くない。

その他、漁師や遊女の形、家などの焼物に彩色した土製玩具については、壺屋に居住する陶工が製作していたことが知られている。尾崎の収集品の中にも、「カマニー（窯側）」の屋号をもつ高江洲某の作品が含まれている。“カマニー”は、壺屋の“七チネー”に属する名家である（七チネーとは、壺屋創設当時、首里王府から屋敷を拝領した家族のことで、陶工として由緒ある家柄である）。このことから、壺屋では陶工の多くが土製玩具の製作に従事していたことがうかがえる。

以上の諸点をふまえて、琉球玩具の製作地についてまとめる、以下の区分が可能である。

- 若狭町：木製玩具・張り子玩具の製作地
- 湧田の崎：張り子玩具（人形）の製作地
- 壺屋：土製品（焼物・練り物）の製作地

今後はこれらの区分を裏付ける資料の収集だけでなく、他地域における玩具製作の可能性も併せて調査を進めていくべきであろう。

さて、昭和初期の琉球玩具（商品玩具）を考えるときに忘れてならないのが矢賀商店の存在である。尾崎コレクション中にも、沖縄での収集品だけではなく、東京の矢賀商店が製作・販売した琉球張り子が数点含まれている。矢賀商店は、1930年代まで琉球

玩具を販売していた会社で、東京の浅草田中町と神田区鍛冶町に店舗をかまえていた。ただし、商店発行のパンフレットをみると「沖縄物産一手販売」の表記があり、玩具以外の物産も手がけていた可能性がある。

1935年頃の商店玩具目録が残されているが、その中に記載されている商品は、張紙（張り子）44種、練物29種、土玩具13種、木彫11種、アダン葉玩具12種、その他13種と多様である。矢賀製の琉球張り子は独特な光沢と彩色で、県外向けに新型の張り子も製作しており、人気が高かった^(注15)。今回の調査で張り子の底部を確認したところ、2種類の商標シールが貼られており、1つには「那覇市若狭町1-266、製造元、矢賀宗友」、もう一方には「東京市浅草田中町72、販売部、矢賀商店」と印刷されていた。上記の内容を素直に解釈すれば、矢賀商店は沖縄で商品を製造し、東京の直営店で販売する仕組みであったということになる。

ところで、矢賀という名字は沖縄で聞き慣れないが、いかなる素性の者だろうか。伊波の論考に、渋沢敬三のアチックミュージアムには浅草田中町の屋嘉宗友の製作した琉球玩具が収蔵されていると述べている箇所がある^(注16)。住所と名前が一致するので、屋嘉と矢賀が同一人物であることは間違いない。あるいは、東京進出に際して他県人に馴染みやすい矢賀姓に改めたのだろうか。もし屋嘉が本名であれば、素性の解明も不可能ではない^(注17)。

ともあれ、郷土玩具が衰退する昭和初期に、これだけの市場展開を為し得たことは注目に値することと言えよう。

さいごに

尾崎清次と『琉球玩具図譜』の研究はやっと端緒についてばかりである。尾崎の収集した琉球資料（琉球玩具と文字記録、書籍等）が沖縄の郷土玩具研究において第一級の資料となることは言うまでもない。今後、尾崎の評価が高まり、研究が進展することを期待するものである。

本稿は尾崎と玩具図譜に関する予備的考察であるが、多くの課題を見いだすことができた。今後の本格的な調査・研究に活かしたい。なお、尾崎の沖縄旅行に関する資料については、現在も調査を継続し

ている。徒労に終わるかも知れないが、資料的価値の重要性をつねに念頭に置きながら、粘り強く調査していきたと思う。

今回の調査は、準備不足が否めなかった。そうした中で、日本玩具博物館の井上重義館長と尾崎織女学芸員、関西沖縄文庫の金城馨氏にはご協力いただき、大変お世話になった。また、『琉文手帖』主宰の新城栄徳氏には本稿に関して多くのご教示をいただいた。文面を借りて厚く感謝申し上げる。

追記

今回の調査と並行して、関西地区で沖縄の郷土玩具を所蔵していると思われる博物館を選定して問い合わせたところ、以下の結果が得られた。

- (1) 国立民族学博物館には、アチック・ミュージアムから移管された昭和初期の琉球張り子が6点ほど登録されているが、これ以外にも中国の張り子として分類された収蔵資料の中に琉球張り子と思われる物品が数点確認されたことから今後の調査で収蔵数が増える可能性はある。
- (2) 京都文化博物館には、朏健之助コレクションの中に琉球玩具が65点（張り子、土人形、船模型、藁人形他）含まれている。
- (3) 天理大学付属天理参考館には、張り子人形だけで5～6点が収蔵されている。

また、東京国立博物館には、1884年（明治17）ごろ収集された最古の琉球玩具が36点収蔵されている。張り子については、ある程度の剥落は否めないものの、保存状態は概ね良好である。なお、本資料は1999年度（平成11）に修理を実施している。

その他、日本全国には相当数の琉球玩具コレクションが存在すると思われるが、これまで実態を把握するための調査が実施されたことはない。今後の進展が望まれる。

表1 『琉球玩具図譜』全頁内容一覧

圖	名 称	種 别	方 言 名	解説の重要事項
1	人形1	張子	ジュリグワーニンジョウ	
2	人形2	張子	ジュリグワーニンジョウ	友寄隆和作(昭和2・3年頃の作品)
3	ズリ馬人形	張子	ジュリグワーニンジョウ	
4	男女踊人形	張子	ジュリグワーニンジョウ	
5	笠踊り	張子		
6	馬乗り1	張子	チンチンウマグワー	伊波普猷「琉球の戯曲に現れた玩具」(昭和5)
7	馬乗り2	張子	チンチンウマグワー	
8	馬乗り3	張子	チンチンウマグワー	友寄隆和作(昭和7年製)
9	獅子	張子	シーシグワー	琉球特有の彩色法
10	獅子舞	張子	シシメーサー	
11	猿1	張子	サルグワー	
12	猿2	張子	サルグワー	「猿の這った形で、琉球独自のもの」
13	犬	張子	イングワー	
14	牛	張子	ウシグワー	
15	牛	張子	ウシグワー	
16	馬	張子	ウマグワー	
17	兎	張子	ウサジグワー	琉球張り子の製作法を記す
18	猫	張子	マヤーグワー	「今より約30年前迄は湧田の崎といふ邊で盛に作られ、島袋、與儀、翁長、岸本、仲里、小橋川、友寄等の諸家があつて(中略)今は友寄の一家を残すのみで他は殆どその製作を絶つに至った」
19	鳩	張子	ホートウグワー	
20	闘鶏	張子	タウチオーラセー	
21	起上り小法師	張子	ウッチリクブサー	友寄隆和作 ※昭和5年に60余歳で没
22	櫂	木	イエーク	昭和7年の玩具市で売られたもの
23	漁夫	土		壺屋の窯側(カマンニー)高江洲作(昭和7年製)
24	釣人	土		ユッカヌヒーに売られたもの
25	釣人	土		
26	馬	土		小児の邪氣を祓う(壺屋製)
27	家	土		ユッカヌヒーに売られたもの(壺屋製)
28	壺	土		京都伏見焼のデンボと類似
29	爬龍船	木	ハーリーブニ	伊波普猷「琉球古今記」6頁(大正15)
30	船	木		
31	矢筈	竹・紙	ヤカジ	
36	ガラガラ	張子		土製のものは壺屋から製出
39	假面	張子	猿のハチブラー	友寄隆烈作(昭和7年製)
40	假面	張子	天狗のハチブラー	友寄隆烈作(昭和7年製)。この木型の原作者は友寄隆裕氏。明治35年66歳で没。
41	假面	張子	鬼のハチブラー	友寄隆烈作(昭和7年製)
42	假面	張子	怪鬼のハチブラー	友寄隆烈作(昭和7年製)
44	廻	紙・竹	マッタクー	
45	廻	紙・竹	カーブヤー	
46	風弾	紙・竹	フウタン	(注59)宮里良保「胡蝶廻」『科學畫報』(T 14. 11)

※47~55は、アダン葉製の笛・風車・指輪・籠・草履、クバ葉製の虫かご・鎖、木製の独楽など

表2 尾崎清次 年譜

年号	西暦	事柄
明治26	1893	2月6日、愛知県西尾市花蔵寺町五貫東25にて地主の総領（跡取り）として出生。 家業は医院。
明治36	1903	愛知日室小学校卒業
明治39	1906	愛知県西尾尋常高等小学校3年終了
明治44	1911	愛知県立第二中学校（現県立岡崎高等学校）卒業
大正4	1915	京都府立医科大学入学
大正6	1917	同校卒業。京都帝国大学医学部小児科教室勤務。笠原道夫博士に師事。
大正10	1921	神戸市技士として神戸市立児童相談所勤務
大正11	1922	関久子（尾崎邦）と結婚
大正12	1923	和歌山の郊外、田圃の中にあった小さな祠の中に、赤い桃を抱いた瓦の猿の置物を見て、玩具に興味を抱く
大正13	1924	婢子会の活動に参加（同年11月～大正15年8月） 筒井英雄（大阪市南の道頓堀南詰にあった郷土玩具店「筒井」の店主） から全国の有名玩具を購入する一方で、自ら地域周辺の郷土玩具を収集
昭和4	1929	大阪市立笠原小児保健研究所（同年1月開所）研究員として勤務。 開所記念出版として『玩具図譜』製作に着手。 『育児上の縁起に関する玩具図譜』第1巻刊行 夏に朝鮮旅行（10日程度）
昭和5	1930	『育児上の縁起に関する玩具図譜』第2巻刊行
昭和6	1931	『育児上の縁起に関する玩具図譜』第3巻刊行
昭和7	1932	沖縄旅行（10日程度）
昭和9	1934	神戸市長田区五位池町1-1-3に小児科医院開業 『朝鮮玩具図譜』第4巻刊行
昭和11	1936	『琉球玩具図譜』第5巻刊行
昭和13	1938	関久子（尾崎邦）と別居
昭和20	1945	大阪空襲で笠原小児研究所が全焼。玩具図譜の関係資料も焼失。
昭和22	1947	日中友好協会、日朝協会、日ソ協会の会員となる 戦後は中国人画家・李平凡と交流。李の帰国（1950年5月）後は、中国と日本版画運動協会とのパイプ役となり、中国木刻展の開催に尽力。この間、中国木刻に関する論文を日中友好誌に発表。
昭和24	1949	京阪神で現代中国美術展を開催（～昭和38）
昭和35	1960	自宅で保育所「愛児園」を開園（～昭和44）
昭和43	1968	近藤文恵を養女とする（尾崎文恵）
昭和44	1969	眼底出血のため半失明状態となる
昭和52	1977	井上重義氏（日本玩具博物館館長）の訪問をうける
昭和54	1979	7月18日、死去（享年87歳）

脚注

- 注1. 日本玩具博物館：兵庫県神崎郡香寺町中仁野町671-3, 1974年（昭和49）、井上重義氏によって設立された。140カ国の玩具や人形など、総数8万点を越える資料を収蔵。わが国を代表する玩具博物館である。
- 注2. 関西沖縄文庫：大阪府大阪市大正区小林東3-13-20, 主宰の金城馨氏が自宅に私設文庫を開いたのが始まり。1986年（昭和61）、大正区に移転。沖縄関連のイベントや情報の発信拠点として精力的に活動している。
- 注3. 伊波普猷は「玩具を意味する琉球語のyiri-munは、貴ひ物の義から転じたものである」と自説を述べている〔1930〕。大城精徳は、日本の古語「いらう（弄う）=もてあそぶ」と「もの」が合体して「いらうもの（弄う物）」、つまり方言の「イーリムン」になったと主張している〔1974〕。
- 注4. 大城〔1974〕
- 注5. 西浦・関〔1994〕
- 注6. 尾崎邦（関久子）「御札に代えて」『玩具図譜』第5巻（村田書店, 1983復刻）
- 注7. 井上〔1988〕
- 注8. 沖縄日報〔1937〕
「マーケット前から東町裏通りにはきのふから早くも玩具市が立つた。大きな日傘の下にいかにも勝気らしい顔をした小母さん方が、毎度馴染の露店を並べて子供づれのおかみさんたちを引きつけてゐるが、臺の上にはセルロイド製品の氾濫だ。郷土玩具を滅ぼしたブリキ製品も、セルロイドに仇を討たれた形である。
- は龍小、櫂小、お前箱の二つ三つをとある露店の片隅でやつと見つけ出した。昔なつかしい『島物』はこういふはかない身の上となつてゐるのだ」
- 注9. 尾崎〔1936〕
- 注10. 尾崎コレクションに含まれる琉球玩具の底部や裏側には「昭和7年・那覇」の墨書きがあり、間違いなく現地で購入したことが判る。
- 注11. 尾崎の養女であった文恵が遺品を管理していた可能性は大きいが、残念なことに本人はすでに故人となり、神戸市灘区の麻耶山天上寺に縁故者もなく葬られている。一方、妻の関久子も同様な

境遇で親族はなく、晩年を知る関係者の多くは高齢のため証言が得られなかった。

- 注12. 沖縄タイムス〔1986〕に次の記事がある。
「同著は百冊発行したが、戦災で失い、神戸市の公庄れいさん（53）がただ一冊保存している。公庄さんの申し出もあるので、近く主人の本を大正区の沖縄文庫（私設）に寄贈し、みんなで手づくりのがんぐを作つてみたい」。

- 注13. 井上〔1988〕の説明は以下の通りである。
「内海（繁）先生などからの助言もあったようで、玩具関係は当館にという話が進みはじめた。しかし神戸で先生の記念館を作るといった話も出始め、重複したものなど一部が入っただけであったが、五位の池の家が老朽化し転居されることになり、残っていた郷土玩具や、郷土玩具に関する文献などを今春引き取ったのである。

ただ先生の収集品を全て引き取ったわけではなく、琉球関係の大部分は大阪の琉球関係の資料館に行っている（後略）」

- 注14. 那覇市〔1979〕

- 注15. 山中〔1955〕の以下の指摘はそのことを物語っている。

「張子玩具は、主として那覇の湧田で製作されていたが、それ以上に東京浅草で芳賀という人が大量に製作していた」

- 注16. 伊波（前掲）

- 注17. 家名が「屋嘉」で名乗頭に「宗」の一字を用いるのは「岑（しん）氏」である。沖縄本島の名護市と那覇市に多い。辞典〔1992〕によると、「岑氏の祖大城筑登之はもと奈良の住人で、橋本休右衛門宗次といい、嘉靖年間に来琉し那覇東村に住んで家来赤頭となり、二世宗休は1674年に金武間切屋嘉地頭職に任じられた」とある。

引用文献

井上重義「尾崎清次先生のこと」『日本玩具博物館

館報・おもちゃと遊び』No.8 (1988年9月15日号)

所収

伊波普猷「琉球の戯曲に現れた玩具」『旅と伝説』

3巻4号(1930年)『伊波普猷全集』第9巻(平凡社)所収

大城精徳「イーリムン(玩具)とティンチャマ(玩具づくり)のこと」『琉球の文化』第3号(琉球文化社、1973年)所収

沖縄県姓氏家系大辞典編集委員会『沖縄県姓氏家系大辞典』(角川書店、1992年)

沖縄タイムス「喫茶室一沖縄通の反戦おばあさん一」
(1986年12月4日付)

沖縄日報「懐しの玩具市“四日の日”近づいて東町
に露店居並ぶ」(1937年6月20日付)

尾崎清次『琉球玩具図譜』(笠原小児保健研究所
1936年)

〃『玩具図譜』第5巻(村田書店、1983年復刻)

個人史をきく会『86才元気印やってます—関久子の
歩みー』(フリーケ、1987年)

那覇市『那覇市史—那覇の民俗—』資料篇第2巻中
の7(那覇市企画部市史編集室、1979年)

西浦宏己・関久子(監)『琉球の玩具とむかし遊び—
沖縄伝統文化を継承する人々ー』(新泉社、1994
年)

中山登『郷土玩具—沖縄・中国・台湾・韓国—』
(誠文堂新光社、1955年)

沖縄県立博物館紀要

第30号（2004年3月30日発行）

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903-0823 那覇市首里大中町1-1

T E L (098) 884-2243

F A X (098) 886-4353

印 刷 有限会社 トヨサキ印刷

BULLETIN

OF THE

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

NO.30 (2004)

NATURAL HISTORY

- Notes on Bird Records in Iheya I. and Izena I., the Ryukyus1
Kenji TAKEHARA, Kazuo NAKAMURA and Osamu KUNIYOSHI

- Activity of Lizards in a Subtropical Forest on Iriomotejima Island, the Southern Ryukyus27
Akira NAKACHI and Satoshi TANAKA

ARTS AND CRAFTS

- In-genryou Work of Art in Okinawa Prefectural Museum37
Satoshi TSUHAKO

FOLKLORE

- The Work of Seiji Ozaki and His Book "Ryukyu Printed Folk Toy's Books"43
Masahiko KUBA